

豊後宏記
宮崎洋一

共著

漢文学

教材と資料

広島文教女子大学

漢文学 教材と資料 目次

はじめに
教材編
韻文

七步詩 (曹植)	一表 (3)
飲酒其五 (陶淵明)	一表 (3)
雜詩其一 (陶淵明)	一表 (3)
勅勒歌 (斛律金)	二表 (5)
代悲白頭翁 (劉希夷)	二表 (5)
涼州詞 (王翰)	三表 (7)
登鸛鵲樓 (王之渙)	三表 (8)
春曉 (孟浩然)	三表 (8)
鹿柴 (王維)	三表 (8)
竹里館 (王維)	四表 (9)
送元二使安西 (王維)	四表 (9)
靜夜思 (李白)	四表 (9)
黃鶴樓送孟浩然之廣陵 (李白)	四表 (9)
早發白帝城 (李白)	四表 (10)
春夜洛城聞笛 (李白)	五表 (11)
清平調詞其一 (李白)	五表 (11)
送友人 (李白)	五表 (11)
除夜作 (高適)	五表 (12)
絕句 (杜甫)	五表 (12)
春望 (杜甫)	六表 (13)
登岳陽樓 (杜甫)	六表 (13)
江南逢李龜年 (杜甫)	六表 (14)
宿府 (杜甫)	六表 (14)
磧中作 (岑參)	七表 (15)
左遷至藍關示姪孫湘 (韓愈)	七表 (15)
三月三十日題慈恩寺 (白居易)	七表 (16)
香爐峰下新卜山居草堂初成偶題東壁 (白居易)	八表 (17)
八月十五日夜禁中獨直對月憶元九 (白居易)	八表 (17)

1

散文

江雪 (柳宗元)	八表 (18)
江南春 (杜牧)	八表 (18)
題烏江亭 (杜牧)	九表 (19)
樂遊原 (李商隱)	九表 (19)
無題 (李商隱)	九表 (19)
飲湖上初晴後雨其二 (蘇軾)	九表 (20)
示兒 (陸游)	九表 (20)
逸話・史伝など	十表 (21)
矛盾	十表 (22)
五十步百步	十表 (22)
楚莊王伐陳	十一表 (23)
狐借虎威	十一表 (23)
蛇足	十一表 (24)
嬰逆鱗	十二表 (25)
有陰德者必有陽報	十三表 (28)
完璧而歸 (司馬遷)	十四表 (30)
四面楚歌 (司馬遷)	十六表 (33)
春夜宴桃李園序 (李白)	十七表 (36)
雜說 (韓愈)	十八表 (38)
名二子說 (蘇洵)	十九表 (39)
思想	十九表 (40)
孔子	十九表 (40)
論語 学而	廿表 (41)
為政	廿表 (42)
里仁 雍也	廿一表 (43)
子路	廿一表 (44)
衛靈公	廿一表 (44)
孟子	廿一表 (44)
荀子	廿二表 (46)
老子	廿二表 (46)
莊子	廿四表 (49)
性惡說	廿四表 (49)
渾沌	廿四表 (50)
第十一章	廿四表 (50)
曳尾於塗中	廿五表 (51)

資料編

一、漢詩の構造について	54
(1) 四声・平仄	53
(2) 近体詩の規則	53
① 「二四不同」 「二六对」 ② 「下三連禁」 ③ 「孤平」 ④ 「冒韻」 ⑤ 「粘法・反法」	53
(3) 日本人の漢詩	55
二、漢文を理解するための基本資料	57
(1) 概説書	57
1-1 歴史・考古	57
1-2 文学 1-3 哲学・思想・宗教 1-4 言語・文字 1-5 芸術・民俗・科学技術など	57
1-6 読書案内 1-7 叢書	57
(2) 字典・辞典・事典	58
(3) 地図・年表など	60
(4) 漢文法の概説	61
(5) 訳注など	61
5-1 訳注叢書 5-2 訳を採す場合の注意 5-3 作品・作者ごとの訳注	62
a 漢以前	63
b 魏晋南北朝 c 隋唐	63
d 宋元 e 明	63
f 清 g 総集	64
h 小説 i 民話 j 理論・評論	64
k 歴史書 l 仏書 m その他	65
(6) 漢字の検索について	66
6-1 読み方による検索	67
6-2 形からの検索	68
6-3 注意	69

はじめに

日本は、古くから、中国から様々な文化を取り入れながら、その文化を形成してきました。中国の書籍は、先進的な文化を伝える情報源として重視され、大切にされてきましたので、現在では中国でも珍しくなっている書籍も、多く残っています。そして、中国語自体を勉強するすがが十分でなかった昔の日本人は、中国の書籍を日本語の語順で読んでゆく、「訓読」「書き下し」などと呼ばれる読み方を編み出し、その文化の摂取に努めました。その結果、中国の書籍の内容や字句は、漢文として、日本の古典に大きな影響を与えただけでなく、日本の古典の一部として、日本の文化の中に根付いてきました。

しかし、昔の日本人がこのようなかで摂取した漢文は、中国の古典全体と比べてみると、独特の特徴を持っています。

まず、内容から考えるならば、漢文はさまざまな古典を含んでおり、『論語』『孟子』『老子』『荘子』などに代表される思想、『史記』『戦国策』『十八史略』などに代表される歴史、李白や杜甫などに代表される文学など、があります。漢文が中国文学とは異なる所以です。そして、このことから、哲・史・文という近代以降の学問の分化が、漢文ひいては日本の学問全体に与えた影響を見る事ができます。

さらに、中学校・高等学校で読んでいる、ひいては日本人が慣れ親しんでいる漢文が圧倒的に古代（太古から漢代まで）と中世（三国時

代から唐代まで）に偏っていることも覚えておかななくてはなりません。極端に言えば、古代の散文と中世の定型詩が中心となっている、と言えると思います。中国の詩文は、宋代以降も書かれ、現在残っている量からすれば、古代・中世よりはるかに多い分量が残っていますが、漢文は、古い時代に大きく偏っているということです。そして、それは、漢文を訓読・書き下しで理解してきた日本人の限界でもあると思います。訓読・書き下しは、中国の書き言葉（文言文）に対して有効ですが、特に近世以降の、口語や俗語が多く混じった文章になると、訓読・書き下し自体が出来ません。よく知られた『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』などが「漢文」としてはほとんど読まれないのはそのためです。

このテキストでは、こうした漢文の特徴をふまえて、韻文と散文から代表的な作品を集めました。

まず、韻文では、漢詩を鑑賞することによって、漢文訓読の力を養いつつ、中国の文化に親しみ、さらに漢詩の成り立ちについても理解を深めます。採録した作品は、わが国でもよく知られている、例えば国語教科書にしばしば取り上げられているような作品を選びました。時代的には漢詩が最も隆盛を誇った唐代のものが中心となりますが、曹植や陶淵明といった唐以前の詩人や、蘇軾や陸游といった唐以後の詩人の作品もとりあげています。採録の際に配慮したのは、日本文学とのかかわりあいの深い作品を選ぶという点です。本書に収めた白居易の「香炉峰下新卜山居草堂初成偶題東壁」

とるべきです。」「八月十五日夜禁中独直对月憶元九

「枕草子」中のエピソードに引用されていることはよく知られていますが、ほかにも『太平記』に引用されて著名な韓愈かんゆうの「左遷させん至藍関しらんかん示姪孫湘しやくせんしやく」や、『奥の細道』中の出典となつてゐる杜甫「春望」、李白「清平調詞せいへい」、蘇軾「飲湖上初晴後雨いんこくしやく」なども採録しました。また、「歳月人を待たずさいげつにひとをまち（陶淵明「雜詩」）あつあつめぐる」や「捲土重來けんじやく（杜牧「題烏江亭たいうかうてい）」のような故事成語の出典となり、人口に膾炙かいじやくした作品も収めています。

後半の散文では、故事、史実、思想、等の中から、代表的なものを選びました。ここでも、『論語』『戦国策』『史記』さらには李白や韓愈の文章などから、日本において有名な、そして、今でも慣用句として使つてゐるような言葉の出典になつてゐるものを中心に選びました。改めて、韻文とあわせて私たちが日頃使つてゐる言葉の奥行きも考へてみてください。

テキストの前半の教材編の形式は、昔の中国人や日本人が読んでいた本の形をまねることにしました。その中に、まず旧漢字で書かれた白文、次に訓点やふりがなをつけた原文、を置いてあります。訓点をつけた文章で読み始め、慣れてきたら、白文でも読んでみてください。ふりがなは、現在の中学校や高等学校の教科書にあわせて、歴史的仮名遣いで示しました。是非とも声に出して読むことを通して、その仮名遣いにも慣れてください。

後半の資料編では、まず、今体詩（律詩、絶句）の仕組みについて解説した「漢詩の構造について」をおきました。基本的な内容ですが、漢詩の最も重要な骨格です。それに続く「漢文を理解するための基本

資料」では、漢文を読むための概説書や字書などと共に、基本的な漢文の訳注を整理しておきました。興味のわいた作品について、訳注を手がかりにして、さらに世界を広げてみてください。そして、これまでの先生方のご努力によつて、これだけ多くの外国の史料を、翻訳で読めるという、恵まれた環境にあることも改めて考へてみてください。

漢文学 教材編

韻文

七步詩

しらほノ詩

曹植

煮豆持作羹漉豉以為汁
萁在釜下燃豆在釜中泣
本是同根生相煎何太急

煮テ豆ヲ持モツテ作ナシ羹アツモト

漉コシテ豉シヲ以モツテ為ス汁ト

萁キハ在リテ二釜ノ下ニ燃エ

豆ハ在リテ二釜ノ中ニ泣ク

本ゼンニ是レ同根生ニ

相煎ニルコト何太急ハナハタナル

飲酒其五

いんしゅ飲酒其五そのご

陶淵明

結廬在人境而無車馬喧問君何能爾
心遠地自偏采菊東籬下悠然見南山
山氣日夕佳飛鳥相與還此中有真意欲辨已忘言

雜詩

結^{ビテ}廬^{いはりヲ}在^ニ人^リ境^ニ而^{シカモ}無^ニ車^シ馬^ノ喧^{かまひすシキ}

問^フ君^ニ何^ゾ能^{ヨク}爾^{シカルヤト}心^{ケレバ}遠^ク地^ニ自^ラ偏^{ナリ}

采^{とル}菊^ヲ東^ノ籬^ノ下^ニ悠^{トシテ}然^ル見^ニ南^ノ山^ヲ

山^ノ氣^ニ日^ニ夕^ニ佳^{ヨク}飛^ル鳥^ノ相^{トモニ}与^{カヘル}還^ル

此^ニ中^ニ有^リ真^ニ意^一欲^{シテ}弃^{セント}已^ニ忘^ル言^ヲ

雜詩其一 雜詩其一 陶淵明

人生無根蒂飄如陌上塵分散逐風轉此已非常身落地
為兄弟何必骨肉親得歡當作樂斗酒聚比鄰盛年不重
來一日難再晨及時當勉勵歲月不待人

人^ノ生^ニ無^ク根^{こん}蒂^{てい}飄^{トシテ}如^シ陌^{はく}上^ノ塵^一

分^シ散^シ逐^{ヒテ}風^ヲ轉^ジ此^レ已^ニ非^ズ常^ノ身^一

落^{チテ}地^ニ為^ル兄^ト弟^ト何^ゾ必^{ズシモ}骨^ノ肉^ノ親^{ノミナランヤ}

得^{ナバ}歡^ヲ 當^ニシレ作^ス樂^{シミヲ} 斗^{モテ}酒^{アフ}聚^ニ比^{メヨ} 鄰^ヲ

盛^シ年^ニ不^ニ重^{ネテハ}來^ラ 一^ニ日^ニ難^シ再^{ビハ}晨^{アヒタナリ}

及^レ時^ニ 當^ニシニ勉^ス 勵^一 歲^ニ月^ニ不^レ待^タ人^ヲ

勅勒歌 勅勒歌

斛律金

勅勒川陰山下天似穹廬籠蓋四野天蒼蒼野茫茫風吹
草低見牛羊

勅^{ちやく}勒^{ろく}川^ノ 陰^{せん}山^ノ下^{モト} 天^ハ似^テ穹^{きゆう}廬^ろ籠^{ろう}蓋^{がい}四^ス野^ヲ

天^{テン}蒼^{そう}蒼^{そう}野^ヤ茫^{ぼう}茫^{ぼう}風^{フウ}吹^キ草^{そう}低^た見^レ牛^ウ羊^ヲ

代悲白頭翁 代悲白頭翁 劉希夷

洛陽城東桃李花飛來飛去落誰家洛陽女兒惜顏色行
逢落花長歎息今年花落顏色改明年花開復誰在已見
松柏摧為薪更聞桑田變成海古人無復洛城東今人還

漢文學 韻文

勅勒歌 代悲白頭翁

二

對落花風年年歲歲花相似歲歲年年人不同寄言全盛
紅顏子應憐半死白頭翁此翁白頭真可憐伊昔紅顏美
少年公子王孫芳樹下清歌妙舞落花前光祿池臺開錦
繡將軍樓閣畫神仙一朝臥病無相識三春行樂在誰邊
宛轉蛾眉能幾時須臾鶴髮亂如絲但看古來歌舞地惟
有黃昏鳥雀悲

洛陽城東桃李花 飛來飛去落誰家ニカ

洛陽女兒惜顏色 行逢落花長歎息ス

今年花落顏色改 明年花開復誰在ル

已見松柏摧為薪 更聞桑田變成海ト

古人無復洛城東 今人還對落花風ノ

年年歲歲花相似 歲歲年年人不レ同ジカラ

<p>寄^レ言^ヲ全盛^ノ紅顏^子 忘^レ憐^レ半死^ノ白頭^翁</p>	<p>此^ノ翁白頭^ニ真^ニ可^レ憐^ム 伊^コ昔^レ紅顏^ノ美少年</p>	<p>公^子王孫^ノ芳樹^ノ下^ニ 清歌^ノ妙舞^ス落花^ノ前</p>	<p>光^禄池台^ニ開^ニ錦^ノ繡^ヲ 将^軍樓閣^ニ画^ガ神^ノ仙^ヲ</p>	<p>一^ノ朝^ニ臥^レ病^ニ無^ク相^識 三^ノ春^ノ行^ノ樂^ノ在^ル誰^ガ邊^ニ</p>	<p>宛^ニ轉^{タル}蛾眉^モ能^ク幾^ノ時^ゾ 須^シ臾^ニ鶴髮^ノ乱^レ如^シ糸^ノ</p>	<p>但^ダ看^ル古^ノ來^ノ歌^ノ舞^ノ地^ニ 惟^タ有^ル黃昏^ノ鳥雀^ノ悲^シ</p>	<p>涼州詞 涼州詞 王翰</p>	<p>葡萄美酒^ノ夜光^杯欲^ク飲^ム琵琶^馬上^ニ催^ス醉^シ臥^シ沙場^ノ君^ノ莫^ク笑^フ古</p>	<p>來^ニ征^シ戰^シ幾^ノ人^ノ回^ル</p>	<p>葡^萄美^酒夜^光杯^ハ 欲^ク飲^ム琵^琶馬^上催^ス</p>	<p>醉^シ臥^シ沙^場君^ノ莫^ク笑^フ 古^ノ來^ノ征^シ戰^シ幾^ノ人^ノ回^ル</p>
--	--	---	--	---	---	--	-------------------	---	---	---	---

漢文学 韻文

涼州詞

三

登鶴鵲樓 春曉 鹿柴

登鶴鵲樓

登鶴鵲樓

王之渙

白日依山盡 黃河入海流 欲窮千里目 更上一層樓

白日依山盡 黃河入海流

欲窮千里目 更上一層樓

春曉

春曉

孟浩然

春眠不覺曉 處處聞啼鳥 夜來風雨聲 花落知多少

春眠不覺曉 處處聞啼鳥

夜來風雨聲 花落知多少

鹿柴

鹿柴

王維

空山不見人 但聞人語響 返景入深林 復照青苔上

空山不見人

但聞人語響

返景入深林 復照青苔上

竹里館

竹里館ちくりくわん

王維

獨坐幽篁裏彈琴復長嘯深林人不知明月來相照

獨坐幽篁裏彈琴復長嘯ひとり じやう せう じやう せう せう せう せう せう

深林人不知明月來相照ふかき じやう せう せう せう せう せう せう

送元二使安西

送元二使安西おくろ げん じの つかひスルヲあん せい せい

王維

渭城朝雨浥輕塵客舍青青柳色新勸君更盡一杯酒西出陽關無故人

出陽關無故人

渭城朝雨浥輕塵客舍青青柳色新ゐ じやうしやうの てうやう うるほし けい ぢん かく しや せい せい りやう しよく あら たナリ

勸君更盡一杯酒西出陽關無故人すすム きみ ニ きらニ つくせい いっ ぱい ノ さけ せい せい せい せい せい せい せい せい

靜夜思

靜夜思せい やの おもヒ

李白

牀前看月光疑是地上霜舉頭望山月低頭思故鄉

牀前看月光疑是地上霜しやうぜん けん みる げつ くらわう けい せい せい せい せい せい せい せい せい

漢文學 韻文

竹里館 送元二使安西 靜夜思

黄鶴樓送孟浩然之廣陵 早發白帝城

拳^{あがテ}頭^{かうべヲ} 望^{のぞミ}二山^{さん} 月^{げつヲ} 一 低^{たレテ}頭^{かうべヲ} 思^{おもフ}二故^{こニ} 鄉^{きやうヲ} 一

黄鶴樓送孟浩然之廣陵 李白

黄^{くわう} 鶴^{かく} 樓^{ろう} 送^{おく}三孟^{まう} 浩^{かう} 然^{ねん}ノ 之^ゆ二広^{くわう} 陵^{りやう} 一

故人西辭黃鶴樓煙花三月下揚州孤帆遠影碧空盡惟見長江天際流

見長江天際流

故^{こニ} 人^{じん} 西^{にしノカタ} 辭^しニ 黃^{くわう} 鶴^{かく} 樓^{ろうヲ} 一 煙^{えん} 花^{くわ} 三 月^{がつ} 下^{くだル}ニ 揚^{やう} 州^{しやうニ} 一

孤^{こニ} 帆^{はんノ} 遠^{えん} 影^{えい} 碧^{へき} 空^{くうニ} 盡^{つき} 惟^{たダ} 見^{みル} 長^{ちやう} 江^{かうノ} 天^{てん} 際^{さいニ} 流^{ながルルヲ} 一

早發白帝城 李白

早^{つとニ} 發^{はつス}ニ 白^{はく} 帝^{てい} 城^{じやうヲ} 一

朝辭白帝彩雲間千里江陵一日還兩岸猿聲啼不住輕

舟已過萬重山

朝^{あしたニ} 辭^し 白^{はく} 帝^{てい} 彩^{さい} 雲^{うんノ} 間^{かん} 千^{せん} 里^{りノ} 江^{かう} 陵^{りやう} 一 日^{いち} 還^{にちニシテかへル} 兩^{りやう} 岸^{がんノ} 猿^{えん} 聲^{せい} 啼^{なイテ} 不^{ざるニ} 住^{やマ} 輕^{けい} 舟^{しう} 已^{すでニ} 過^{ナグ} 萬^{ばん} 重^{ちやうノ} 山^{やま}

兩^{りやう} 岸^{がんノ} 猿^{えん} 聲^{せい} 啼^{なイテ} 不^{ざるニ} 住^{やマ} 輕^{けい} 舟^{しう} 已^{すでニ} 過^{ナグ} 萬^{ばん} 重^{ちやうノ} 山^{やま}

春夜洛城聞笛

春夜洛城聞笛

李白

誰家玉笛暗飛聲散入春風滿洛城此夜曲中聞折柳何人不起故園情

誰家玉笛暗飛聲散入春風滿洛城

此夜曲中聞折柳何人不起故園情

清平調詞其一

清平調詞其一

李白

雲想衣裳花想容春風拂檻露華濃若非群玉山頭見會向瑤臺月下逢

雲想衣裳花想容春風拂檻露華濃

若非群玉山頭見會向瑤臺月下逢

送友人

送友人

李白

青山橫北郭白水遶東城此地一為別孤蓬萬里征浮雲

漢文學 韻文

春夜洛城聞笛 清平調詞 送友人

五

除夜作 絶句

遊子意落日故人情揮手自茲去蕭蕭班馬鳴

青山横タハリ北郭ニ白水遠めぐル東城ヲ

此地一タビ為別レヲ孤蓬万里征ゆク

浮雲遊子意落日故人情

揮手ふるツテ自ヨリ茲去ココ蕭蕭トシテ班馬鳴ク

除夜作

除夜作ちよやノサク

高適

旅館寒燈獨不眠客心何事轉凄然故鄉今夜思千里霜鬢明朝又一年

旅館ノ寒燈ヲ獨リ不レ眠ラ客心何事ソノ轉うた凄然タル

故鄉今夜思ニ千里ヲ霜鬢さうびん明朝また又一年

絶句

絶句ぜつ

杜甫

江碧鳥逾白山青花欲然今春看又過何日是歸年

江かう碧みどりニシテ鳥とり逾いよいよ白しろク山やま青あをクシテ花はな欲ほつス然も エント

今こん春しゅん看みずみず又また過サツ何いづレノ日ひカ是コレ歸き年ねん ナラン

春望

春しゅん望ぼう

杜甫

國破山河在城春草木深感時花濺淚恨別鳥驚心烽火連三月家書抵萬金白頭搔更短渾欲不勝簪

國くに破やぶレテ山さん河が在あり城しろ春はるニシテ草さう木もく深ふかシ

感かんシテハ時ときニ花はなニモ濺そそギ淚なみだヲ恨うらみデハ別わかレヲ鳥とりニモ驚おどろカス心こころヲ

烽ほう火くわ連つらナリ三さん月げつニ家か書しよ抵あた二に萬ばん金きんニ

白はく頭とう搔かケバ更さらニ短みじかク渾すベテ欲ほつス不ぎラント勝たヘ簪しんニ

登岳陽樓

登のぼル二に岳がく陽やう樓ろうニ

杜甫

昔聞洞庭水今上岳陽樓吳楚東南析乾坤日夜浮親朋無一字老病有孤舟戎馬關山北憑軒涕泗流

漢文学 韻文

春望 登岳陽樓

六

昔聞洞庭水 今上岳陽樓

吳楚東南析 乾坤日夜浮

親朋無一字 老病有孤舟

戎馬關山北 憑軒涕泗流

江南逢李龜年 杜甫

岐王宅裏尋常見 崔九堂前幾度聞 正是江南好風景 落花時節又逢君

花時節又逢君

岐王宅裏尋常見 崔九堂前幾度聞

正是江南好風景 落花時節又逢君

宿府 杜甫

清秋幕府井梧寒 獨宿江城蠟炬殘 永夜角聲悲自語 中天月色好誰看 風塵荏苒音書絕 關塞蕭條行路難 已忍

伶俜十年事強移棲息一枝安

清秋幕府井梧寒 独宿江城一蠟炬 殘

永夜角声悲自語 中天月色好誰看

風塵荏苒音書絕 閑塞蕭條行路難

已忍伶俜十年事 強移棲息一枝安

磧中作

磧中作

岑參

走馬西來欲到天 辭家見月兩回圓 今夜不知何處宿 平

沙萬里絕人煙

走馬西來欲到天 辭家見月兩回圓

今夜不知何處宿 平沙萬里絕人煙

左遷至藍關示姪孫湘

韓愈

左遷至藍關示姪孫湘

漢文學 韻文

磧中作 左遷至藍關示姪孫湘

七

三月三十日題慈恩寺

一封朝奏九重天夕貶潮州路八千欲為聖明除弊事肯
將衰朽惜殘年雲橫秦嶺家何在雪擁藍關馬不前知汝
遠來應有意好收吾骨瘴江邊

一封朝奏九重天夕貶潮州路八千

欲為聖明除弊事肯將衰朽惜殘年

雲橫秦嶺家何在雪擁藍關馬不前

知汝遠來應有意好收吾骨瘴江邊

三月三十日題慈恩寺 白居易

三月三十日題慈恩寺

慈恩春色今朝盡日徘徊倚寺門惆悵春歸留不得紫
藤花下漸黃昏

慈恩春色今朝盡日徘徊倚寺門

惆悵ちやうさつ 春歸ハルノ 留ル 不レ 得ル 紫藤花下むらさきとうげ 漸黃昏やうやく

香爐峰下新卜山居草堂初成偶題東壁 白居易

香爐峰下新卜山居草堂初成偶題東壁

日高睡足猶慵起小閣重衾不怕寒遺愛寺鐘欹枕聽香爐峰雪撥簾看匡廬便是逃名地司馬仍為送老官心泰身寧是歸處故鄉何獨在長安

日高睡足猶慵起小閣重衾不怕寒

遺愛寺鐘欹枕聽香爐峰雪撥簾看

匡廬便是逃名地司馬仍為送老官

心泰身寧是歸處故鄉何獨在長安

八月十五日夜禁中獨直對月憶元九 白居易

八月十五日夜禁中獨直對月憶元九

漢文學 韻文

香爐峰下新卜山居 八月十五日夜禁中獨直 八

江雪 江南春

銀臺金闕夕沈沈獨宿相思在翰林三五夜中新月色二
千里外故人心渚宮東面煙波冷浴殿西頭鐘漏深猶恐
清光不同見江陵卑濕足秋陰

銀台金闕夕沈沈 獨宿相思在翰林

三五夜中新月色 二千里外故人心

渚宮東面煙波冷 浴殿西頭鐘漏深

猶恐清光不二同見 江陵卑濕足秋陰

江雪 柳宗元

千山鳥飛絕萬徑人蹤滅孤舟蓑笠翁獨釣寒江雪

千山鳥飛絕 萬徑人蹤滅

孤舟蓑笠翁 獨釣寒江雪

江南春 杜牧

千里鶯啼綠映紅水村山郭酒旗風南朝四百八十寺多
少樓臺烟雨中

千里鶯啼綠映紅水村山郭酒旗風

南朝四百八十寺多
少樓臺烟雨中

題烏江亭

題烏江亭

杜牧

勝敗兵家事不期包羞忍恥是男兒江東子弟多才俊捲
土重來未可知

勝敗兵家事不期包羞忍恥是男兒

江東子弟多才俊
捲土重來未可知

樂遊原

樂遊原

李商隱

向晚意不適驅車登古原夕陽無限好只是近黃昏

向晚意不適驅車登古原

夕陽無限好 只是近黃昏

無題 李商隱

相見時難別亦難東風無力百花殘
春蠶到死絲方盡蠟炬成灰淚始乾
曉鏡但愁雲鬢改夜吟應覺月光寒
蓬山此去無多路青鳥殷勤為探看

相見時難別亦難東風無力百花殘

春蠶到死絲方盡蠟炬成灰淚始乾

曉鏡但愁雲鬢改夜吟應覺月光寒

蓬山此去無多路青鳥殷勤為探看

飲湖上初晴後雨其二 蘇軾

飲湖上一初晴後雨其二

水光潑灑晴方好山色空濛雨亦奇
欲把西湖比西子淡

粧濃抹總相宜

水光スレバ 澱れん 灑えん 晴トシテ 方レテ 好まさニ 山色よシ 空濛トシテ 雨亦モ 奇ナリ

欲スレバ 把ツテ 西湖ヲ 比中サント 西子ニ 淡粧濃抹ニ 總相宜テ 宜よシ

示兒しめス
兒こニ

陸游

死去元知萬事空但悲不見九州同王師北定中原日
祭無忘告乃翁

死ニ 去レバ 元ヨリ 知ル 萬事空シト 但タダ 悲シキハ 不ル 見ニ 九州同ノ 同ジキヲ

王師北定中原日 家祭無忘告乃翁

散文

矛楯

矛楯

〔韓非子〕「難」一

楚人有鬻楯與矛者譽之曰吾楯之堅莫能陷也又譽其
矛曰吾矛之利於物無不陷也或曰以子之矛陷子之楯
何如其人弗能應也

楚人 有下 鬻二 楯 与 矛 者上 譽レ之 曰 吾 楯 之 堅、 莫ニ

能 陷一也。 又 譽ニ 其 矛 曰 吾 矛 之 利、 於レ 物 無レ 不

陷也。 或 曰、 以ニ 子 之 矛、 陷ニ 子 之 楯、 何 如。 其 人

弗レ 能レ 応レ 也。

五十歩百歩

五十歩 百歩

〔孟子〕「梁惠王」上

孟子對曰王好戰請以戰喻填然鼓之兵刃既接棄甲曳
兵而走或百歩而後止或五十歩而後止以五十歩笑百

步則何如曰不可直不百步耳是亦走也

孟子 對曰、「王好戰、請以戰。喻。填然鼓之、兵

刃既接。棄甲曳兵而走。或百步而後止。或

五十步而後止。以五十步笑一百步、則何如。」

曰、「不可。直不百步耳。是亦走也。」

楚莊王伐陳 楚莊王伐陳

〔說苑〕「權謀」

楚莊王欲伐陳使人視之使者曰陳不可伐也莊王曰何故對曰其城郭高溝壑深蓄積多其國寧也王曰陳可伐也夫陳小國也而蓄積多蓄積多則賦斂重賦斂重則民怨上矣城郭高溝壑深則民力罷矣興兵伐之遂取陳

楚莊王欲伐陳、使二人視之。使者曰、「陳不可

伐也。」莊王曰、「何故。」對曰、「其城郭高、溝壑深、

狐借虎威

蓄積多、其國寧也。王曰、「陳可伐也。夫陳小

國也。而蓄積多、蓄積多、則賦斂重。賦斂重、

則民怨上矣。城郭高、溝壑深、則民力罷矣。

興兵伐之、遂取陳。

狐借虎威

狐借虎威

〔戰國策〕「楚策」

荆宣王問羣臣曰吾聞北方之畏昭奚恤也果誠何如羣臣莫對江一對曰虎求百獸而食之得狐狐曰子無敢食我也天帝使我長百獸今子食我是逆天帝命也子以我為不信吾為子先行子隨我後觀百獸之見我而敢不走乎虎以為然故遂與之行獸見之皆走虎不知獸畏己而走也以為畏狐也今王之地方五千里帶甲百萬而專屬之昭奚恤故北方之畏奚恤也其實畏王之甲兵也猶百

獸之畏虎也

荊宣王問群臣曰、吾聞北方之畏昭奚恤

也。果誠何如。群臣莫對。江一對曰、虎求百

獸而食之。得狐。狐曰、子無敢食我。天帝

使三我長百獸。今子食我。是逆天帝命也。子

以我為不信、吾為子先行。子隨我後、觀百

獸之見我而不敢走乎。虎以為然、故遂与

之行。獸見之皆走。虎不知獸畏己而走也。

以為畏狐也。今王之地方五千里、帶甲百

万、而專屬之。昭奚恤一故北方之畏昭奚

其、實畏王之甲兵也。猶百獸之畏虎也。

蛇足

蛇足

〔戰國策〕〔齊策〕

漢文学 散文

蛇足

十二

昭陽爲楚伐魏覆軍殺將得八城移兵而攻齊陳軫爲齊王使見昭陽再拜賀戰勝起而問楚之法覆軍殺將其官爵何也昭陽曰官爲上柱國爵爲上執珪陳軫曰異貴於此者何也曰唯令尹耳陳軫曰令尹貴矣王非置兩令尹也臣竊爲公譬可也楚有祠者賜其舍人卮酒舍人相謂曰數人飲之不足一人飲之有餘請畫地爲蛇先成者飲酒一人蛇先成引酒且飲之乃左手持卮右手畫蛇曰吾能爲之足未成一人之蛇成奪其卮曰蛇固無足子安能爲之足遂飲其酒爲蛇足者終亡其酒今君相楚而攻魏破軍殺將得八城不弱兵欲攻齊齊畏公甚公以是爲名足矣官之上非可重也戰無不勝而不知止者身且死爵且後歸猶爲蛇足也昭陽以爲然解軍而去

漢文学 散文	昭陽 <small>せうやう</small> 為 <small>ため</small> 楚 <small>そ</small> 伐 <small>う</small> 魏 <small>ぎ</small> 覆 <small>くつがへし</small> 軍 <small>ぐん</small> 殺 <small>ころ</small> 將 <small>しょう</small> 得 <small>え</small> 二 <small>は</small> 城 <small>じやう</small> 一 <small>ち</small> 移 <small>うつ</small> 兵 <small>しん</small> 而 <small>へい</small>	攻 <small>せむ</small> 齊 <small>せい</small> 陳 <small>ちん</small> 軫 <small>しん</small> 為 <small>ため</small> 二 <small>せい</small> 齊 <small>せい</small> 王 <small>わう</small> 一 <small>つかひ</small> 使 <small>し</small> 見 <small>まみ</small> 二 <small>え</small> 昭 <small>せう</small> 陽 <small>やう</small> 一 <small>さい</small> 再 <small>さい</small> 拜 <small>はい</small> 賀 <small>が</small> 二 <small>せん</small> 戰 <small>せん</small> 勝 <small>しょう</small> 一 <small>せう</small>	起 <small>た</small> 而 <small>ち</small> 問 <small>と</small> 楚 <small>そ</small> 之 <small>の</small> 法 <small>はふ</small> 覆 <small>くつがへし</small> 軍 <small>ぐん</small> 殺 <small>ころ</small> 將 <small>しょう</small> 其 <small>その</small> 官 <small>くわん</small> 爵 <small>しやく</small> 何 <small>なん</small> 也 <small>ぞ</small> 昭 <small>せう</small>	陽 <small>やう</small> 曰 <small>いは</small> 官 <small>くわん</small> 為 <small>なり</small> 二 <small>じやう</small> 上 <small>じやう</small> 柱 <small>ちゆう</small> 國 <small>こく</small> 一 <small>と</small> 爵 <small>しやく</small> 為 <small>なり</small> 二 <small>じやう</small> 上 <small>じやう</small> 執 <small>しつ</small> 珪 <small>けい</small> 陳 <small>ちん</small> 軫 <small>しん</small> 曰 <small>いは</small> 異 <small>い</small>	貴 <small>たう</small> 二 <small>と</small> 於 <small>こ</small> 此 <small>れ</small> 一 <small>の</small> 者 <small>もの</small> 何 <small>なん</small> 也 <small>ぞ</small> 曰 <small>いは</small> 唯 <small>ただ</small> 令 <small>れい</small> 尹 <small>みん</small> 耳 <small>のみ</small> 陳 <small>ちん</small> 軫 <small>しん</small> 曰 <small>いは</small> 令 <small>れい</small> 尹 <small>みん</small>	貴 <small>たう</small> 矣 <small>し</small> 王 <small>わう</small> 非 <small>あら</small> 置 <small>お</small> 二 <small>り</small> 兩 <small>りやう</small> 令 <small>れい</small> 尹 <small>みん</small> 也 <small>なり</small> 臣 <small>しん</small> 窃 <small>ひそ</small> 為 <small>ため</small> 二 <small>こう</small> 公 <small>こう</small> 譬 <small>たと</small> 可 <small>か</small> 也 <small>ぞ</small>	楚 <small>そ</small> 有 <small>あり</small> 二 <small>し</small> 祠 <small>し</small> 者 <small>しや</small> 一 <small>の</small> 賜 <small>たま</small> 二 <small>そ</small> 其 <small>その</small> 舍 <small>しや</small> 人 <small>じん</small> 一 <small>の</small> 庖 <small>し</small> 酒 <small>しゆ</small> 一 <small>の</small> 舍 <small>しや</small> 人 <small>じん</small> 相 <small>あひ</small> 謂 <small>い</small> 曰 <small>いは</small> 數 <small>すう</small>	人 <small>にん</small> 飲 <small>の</small> 之 <small>の</small> 不 <small>ず</small> 足 <small>た</small> 一 <small>の</small> 人 <small>にん</small> 飲 <small>の</small> 之 <small>の</small> 有 <small>あり</small> 余 <small>あま</small> 請 <small>こ</small> 画 <small>ゑ</small> 地 <small>ち</small> 為 <small>つ</small> 蛇 <small>へび</small>	先 <small>ま</small> 成 <small>なる</small> 者 <small>もの</small> 飲 <small>の</small> 酒 <small>さけ</small> 一 <small>の</small> 人 <small>にん</small> 蛇 <small>へび</small> 先 <small>ま</small> 成 <small>なる</small> 引 <small>ひ</small> 酒 <small>さけ</small> 且 <small>ま</small> 飲 <small>の</small> 之 <small>の</small> 乃 <small>すなは</small>	左 <small>さ</small> 手 <small>しゅ</small> 持 <small>も</small> 持 <small>も</small> 右 <small>う</small> 手 <small>しゅ</small> 画 <small>え</small> 蛇 <small>へび</small> 曰 <small>いは</small> 吾 <small>われ</small> 能 <small>よ</small> 為 <small>つ</small> 之 <small>の</small> 足 <small>あ</small> 一 <small>の</small> 未 <small>いま</small> 成 <small>なる</small>	一 <small>の</small> 人 <small>にん</small> 之 <small>の</small> 蛇 <small>へび</small> 成 <small>なる</small> 奪 <small>う</small> 二 <small>そ</small> 其 <small>その</small> 庖 <small>し</small> 曰 <small>いは</small> 蛇 <small>へび</small> 固 <small>も</small> 無 <small>な</small> 足 <small>あ</small> 一 <small>の</small> 子 <small>し</small> 安 <small>い</small> 能 <small>よ</small>	為 <small>つ</small> 二 <small>の</small> 之 <small>の</small> 足 <small>あ</small> 一 <small>の</small> 遂 <small>つ</small> 飲 <small>の</small> 二 <small>そ</small> 其 <small>その</small> 酒 <small>さけ</small> 一 <small>の</small> 為 <small>な</small> 二 <small>の</small> 蛇 <small>だ</small> 足 <small>そ</small> 一 <small>の</small> 者 <small>もの</small> 終 <small>つ</small> 亡 <small>う</small> 二 <small>の</small> 其 <small>その</small> 酒 <small>さけ</small> 一 <small>の</small> 今 <small>いま</small>
-----------	---	--	---	--	--	---	--	--	--	---	---	---

君相楚而攻魏、破軍殺將、得二八城、不弱兵
 欲攻齊。齊畏公甚。公以是為名足矣。官之
 上非可重也。戰無不勝、而不知止者、身且
 死、爵且後。歸猶為蛇足也。昭陽以為然、解
 軍而去。

嬰逆鱗

嬰二 逆 鱗一

〔韓非子〕「說難」

昔者彌子瑕有寵於衛君。衛國之法竊駕君車者罪。則彌
 子瑕母病人間往夜告彌子。彌子矯駕君車以出。君聞而
 賢之曰孝哉。為母之故忘其刑罪。異日與君遊於果園。食
 桃而甘。不盡以其半啗君。君曰愛我哉。忘其口味。以啗寡
 人。及彌子色衰愛弛。得罪於君。君曰是固嘗矯駕吾車。又
 嘗啗我以餘桃。故彌子之行未變於初也。而以前之所以

見賢而後獲罪者愛憎之變也故有愛於主則智當而加
 親有憎於主則智不當見罪而加疏故諫說談論之士不
 可不察愛憎之主而後說焉夫龍之爲蟲也柔可狎而騎
 也然其喉下有逆鱗徑尺若人有嬰之者則必殺人人主
 亦有逆鱗說者能無嬰人主之逆鱗則幾矣

昔者彌子瑕有寵於衛君一衛國之法、竊駕

君車一者罪則彌子瑕母病人間往夜告彌

子一彌子矯駕二君車一以出君聞而賢之曰、孝

哉。爲母之故、忘其別罪、異日與君遊於果

園。食桃而甘、不盡、以其半啗君。君曰、愛我

哉。忘其口味、以啗寡人、及彌子色衰愛弛、

得二罪於君一君曰、是固嘗矯駕二吾車一又嘗啗

有陰德者必有陽報

我^{われ}以^{もつ}余^テ桃^{セリト}一^ヤ故^{タウ}弥^ヲ子^ハ之^ニ行^ユ未^ハ變^レ於^ニ初^ハ也^{ナリ}。而^{シカ}以^モ三^ツ前^{サキ}之^ノ所^ヨ以^ス見^レ賢^{ケン}而^{シテ}後^{ノチ}獲^エ罪^{ツミ}者^ハ、愛^{アイ}憎^{ソウ}之^ノ變^{ヘン}也^{ナリ}。故^{ユズ}有^レ愛^{アイ}於^ニ主^{シユ}一^ニ則^{スナハチ}智^チ當^{アタリテ}而^{シテ}加^{クハ}親^レ、有^レ憎^{ソウ}於^ニ主^{シユ}一^ニ則^{スナハチ}智^チ不^ズ當^{アタラ}、見^レ罪^{ツミ}而^{シテ}加^{クハ}疏^ソ。故^{ユズ}諫^{カン}說^{ゼイ}談^{タン}論^{ロン}之^ノ士^シ、不^ズ可^ベレ下^{カラ}察^{サツ}二^ニ愛^{アイ}憎^{ソウ}之^ノ主^{シユ}一^ニ而^{シテ}後^{ノチ}說^{トク}上^カ焉^{ナリ}。夫^{ソレ}龍^{リョウ}之^ノ為^タレ虫^{ムシ}也^{ナリ}、柔^{ジュウ}可^ベレ狎^{ニヤ}而^{シテ}騎^キ一^ス也^{ナリ}。然^{シカ}レドモ其^{ソノ}喉^{コウ}下^カ有^レ二^ニ逆^{ギャク}鱗^{リン}徑^{ケイ}尺^{シツ}一^ス若^モ人^{ヒト}有^レ二^ニ嬰^{オウ}之^ノ者^{モノ}、則^{スナハチ}必^{カナラズ}殺^{コロス}人^{ヒト}。人^{ジン}主^{シユ}亦^{また}有^レ二^ニ逆^{ギャク}鱗^{リン}一^ス說^{トク}者^{モノ}能^{ヨク}無^レ嬰^{オウ}二^ニ人^{ジン}主^{シユ}之^ノ逆^{ギャク}鱗^{リン}一^ス則^{スナハチ}幾^{チカシ}矣^{ナリ}。

有陰德者必有陽報

〔說苑〕「復恩」

有^{アル}二^ニ陰^{イン}德^{トク}一^者必^{カナラズ}有^レ二^ニ陽^{ヤウ}報^{ハウ}一^ス

楚莊王賜羣臣酒日暮酒酣燈燭滅乃有人引美人之衣者美人援絕其冠纓告王曰今者燭滅有引妾衣者妾援

得其冠纓持之趣火來上視絕纓者王曰賜人酒使醉失
 禮奈何欲顯婦人之節而辱士乎乃命左右曰今日與寡
 人飲不絕冠纓者不懽羣臣百有餘人皆絕去其冠纓而
 上火卒盡懽而罷居二年晉與楚戰有一臣常在前五合
 五獲首却敵卒得勝之莊王恠而問曰寡人德薄又未嘗
 異子子何故出死不疑如是對曰臣當死往者醉失禮王
 隱忍不暴而誅也臣終不敢以蔭蔽之德而不顯報王也
 常願肝腦塗地用頸血湔敵久矣臣乃夜絕纓者也遂斥
 晉軍楚得以強此有陰德者必有陽報也

楚そノ 莊さう 王わう 賜たまフ 群ぐん 臣しんニ 酒さけヲ 一一 日ひ 暮くレ 酒さけ 酣たけなはシテ 灯とう 燭しよく 滅めつス 乃すなはチ 有あり
 人ひと 引ひク 美び 人じん 之の 衣ころもヲ 一一 者もの 上上 美び 人じん 援ひキテ 絶たチ 二二 其その 冠くわん 纓えいヲ 一一 告つゲテ 王わうニ
 曰いはク 一一 今い 者ま 燭しよく 滅めつスルニ 有あり 下下 引ひク 二二 妾せふノ 衣ころもヲ 一一 者もの 上上 妾せふ 援ひキテ 得エテ 二二 其その 冠くわん 纓えいヲ 一一

以 <small>もつて</small> 強 <small>つよ</small> 一 <small>ひと</small> 此 <small>こ</small> 有 <small>あ</small> 二 <small>ふた</small> 陰 <small>いん</small> 德 <small>とく</small> 一 <small>ひと</small> 者 <small>もの</small> 必 <small>かならず</small> 有 <small>あ</small> 二 <small>ふた</small> 陽 <small>やう</small> 報 <small>ほう</small> 一 <small>ひと</small> 也 <small>なり</small> 。	敵 <small>てき</small> 久 <small>ひさ</small> 矣 <small>なり</small> 。臣 <small>しん</small> 乃 <small>すなはち</small> 夜 <small>よる</small> 絶 <small>た</small> 纓 <small>しん</small> 者 <small>もの</small> 也 <small>なり</small> 。遂 <small>つひ</small> 斥 <small>しりぞ</small> 二 <small>ふた</small> 晋 <small>しん</small> 軍 <small>ぐん</small> 一 <small>ひと</small> 楚 <small>そ</small> 得 <small>え</small> 二 <small>ふた</small> 。	而 <small>ずんば</small> 不 <small>あらは</small> 中 <small>ちゆう</small> 顯 <small>けん</small> 報 <small>ほう</small> 上 <small>じやう</small> 王 <small>わう</small> 也 <small>なり</small> 。常 <small>つね</small> 願 <small>ねが</small> 下 <small>くだ</small> 肝 <small>かん</small> 腦 <small>なう</small> 塗 <small>まみ</small> レ地 <small>ち</small> 、用 <small>もつて</small> 二 <small>ふた</small> 頸 <small>けい</small> 血 <small>けつ</small> 一 <small>ひと</small> 滿 <small>み</small> 上 <small>じやう</small> 。	隱 <small>いん</small> 忍 <small>にん</small> 、不 <small>ざり</small> 二 <small>ふた</small> 暴 <small>ばう</small> 而 <small>し</small> 誅 <small>ちゆう</small> 一 <small>ひと</small> 也 <small>なり</small> 。臣 <small>しん</small> 終 <small>つひ</small> 不 <small>ざ</small> 敢 <small>あへ</small> 以 <small>もつて</small> 二 <small>ふた</small> 陰 <small>いん</small> 蔽 <small>へい</small> 之 <small>の</small> 德 <small>とく</small> 、	死 <small>し</small> 不 <small>ざ</small> 疑 <small>ぎ</small> 如 <small>ごと</small> レ是 <small>なり</small> 。對 <small>たい</small> 曰 <small>いは</small> 、臣 <small>しん</small> 當 <small>たう</small> レ死 <small>し</small> 。往 <small>き</small> 者 <small>もの</small> 醉 <small>ゑ</small> 失 <small>し</small> レ礼 <small>らい</small> 、王 <small>わう</small>	而 <small>と</small> 問 <small>と</small> 曰 <small>いは</small> 、寡 <small>くわ</small> 人 <small>じん</small> 德 <small>とく</small> 薄 <small>うす</small> 、又 <small>また</small> 未 <small>いま</small> 二 <small>ふた</small> 嘗 <small>かつ</small> 異 <small>こと</small> レ子 <small>し</small> 。子 <small>し</small> 何 <small>なん</small> 故 <small>ゆゑ</small> 出 <small>い</small> レ	在 <small>あ</small> レ前 <small>まへ</small> 。五 <small>ご</small> 合 <small>がふ</small> 五 <small>ご</small> 獲 <small>え</small> レ首 <small>くび</small> 却 <small>しりぞ</small> レ敵 <small>てき</small> 、卒 <small>つひ</small> 得 <small>う</small> レ勝 <small>か</small> レ之 <small>の</small> 。莊 <small>さう</small> 王 <small>わう</small> 恠 <small>あや</small> シ	卒 <small>つひ</small> 尽 <small>つ</small> レ權 <small>けん</small> 而 <small>し</small> 罷 <small>や</small> ム。居 <small>を</small> 二 <small>ふた</small> 年 <small>ねん</small> 、晋 <small>しん</small> 与 <small>と</small> 楚 <small>そ</small> 戰 <small>たた</small> 。有 <small>あ</small> 二 <small>ふた</small> 一 <small>ひと</small> 臣 <small>しん</small> 常 <small>つね</small>	權 <small>けん</small> 群 <small>ぐん</small> 臣 <small>しん</small> 百 <small>ひやく</small> 有 <small>あ</small> 二 <small>ふた</small> 余 <small>よ</small> 人 <small>にん</small> 、皆 <small>みな</small> 絶 <small>ぜつ</small> 去 <small>きよ</small> ス其 <small>その</small> 冠 <small>くわん</small> 纓 <small>えい</small> 一 <small>ひと</small> 而 <small>し</small> 上 <small>じやう</small> レ火 <small>ひ</small> 、	命 <small>めい</small> 二 <small>ふた</small> 左 <small>さ</small> 右 <small>う</small> 一 <small>ひと</small> 曰 <small>いは</small> 、今 <small>こん</small> 日 <small>にち</small> 与 <small>と</small> 二 <small>ふた</small> 寡 <small>くわ</small> 人 <small>じん</small> 一 <small>ひと</small> 飲 <small>の</small> ム、不 <small>ざ</small> レ絶 <small>た</small> 二 <small>ふた</small> 冠 <small>くわん</small> 纓 <small>えい</small> 一 <small>ひと</small> 者 <small>もの</small> 不 <small>ざ</small> レ	醉 <small>ゑ</small> 失 <small>し</small> レ礼 <small>らい</small> 、奈 <small>いか</small> 何 <small>ん</small> 欲 <small>ほつ</small> レ顯 <small>けん</small> 二 <small>ふた</small> 婦 <small>ふ</small> 人 <small>じん</small> 之 <small>の</small> 節 <small>せつ</small> 一 <small>ひと</small> 而 <small>し</small> 辱 <small>はづ</small> レ士 <small>し</small> 乎 <small>や</small> 。乃 <small>すなは</small> ち	持 <small>じ</small> レ之 <small>の</small> 。趣 <small>うなが</small> レ火 <small>ひ</small> 來 <small>きた</small> リ上 <small>のぼ</small> レ視 <small>み</small> 二 <small>ふた</small> 絶 <small>た</small> レ纓 <small>えい</small> 者 <small>もの</small> 一 <small>ひと</small> 。王 <small>わう</small> 曰 <small>いは</small> 、賜 <small>たま</small> 二 <small>ふた</small> 人 <small>ひと</small> 酒 <small>さけ</small> 一 <small>ひと</small> 、使 <small>し</small> 二 <small>ふた</small>
---	---	--	--	---	--	---	---	---	---	---	---

完璧而歸

完まったウシテ璧ヘキヲ而カヘル歸

〔史記〕「廉頗藺相如傳」

於是王召見問藺相如曰秦王以十五城請易寡人之璧可予不相如曰秦彊而趙弱不可不許王曰取吾璧不予我城奈何相如曰秦以城求璧而趙不許曲在趙趙予璧而秦不予趙城曲在秦均之二策寧許以負秦曲王曰誰可使者相如曰王必無人臣願奉璧往使城入趙而璧留秦城不入臣請完璧歸趙趙王於是遂遣相如奉璧西入秦秦王坐章臺見相如相如奉璧奏秦王秦王大喜傳以示美人及左右左右皆呼萬歲相如視秦王無意償趙城乃前曰璧有瑕請指示王王授璧相如因持璧卻立倚柱怒髮上沖冠謂秦王曰大王欲得璧使人發書至趙王趙王悉召群臣議皆曰秦貪負其彊以空言求璧償城恐不

可得議不欲予秦璧臣以為布衣之交尚不相欺況大國乎且以一璧之故逆彊秦之驩不可於是趙王乃齋戒五日使臣奉璧拜送書於庭何者嚴大國之威以修敬也今臣至大王見臣列觀禮節甚倨得璧傳之美人以戲弄臣臣觀大王無意償趙王城邑故臣復取璧大王必欲急臣臣頭今與璧俱碎於柱矣相如持其璧睨柱欲以擊柱

於レ是王召見問二藺相如一曰「秦王以二十城一

請レ易二寡人之璧一可レ予不」相如曰「秦彊而趙

弱。不レ可レ不レ許。」王曰、「取二吾璧一、不レ予二我城一、奈何。」

相如曰、「秦以城求レ璧、而趙不レ許、曲在レ趙。趙

予レ璧而秦不レ予二趙城一、曲在レ秦。均二之、二策一、寧

許以負二秦曲一。」王曰、「誰可レ使者。」相如曰、「王必

漢文学 散文	無 ^な ク ^ン バ ^バ 、 ^{ひと} 人 ^{ひと} 、 ^{しん} 臣 ^{しん} 願 ^{ねが} ハ ^ク ハ ^ハ 願 ^{ねが} 奉 ^{ほう} 壁 ^{へき} 往 ^ゆ 使 ^{つか} 城 ^{しろ} 入 ^い 趙 ^{てう} 而 ^に 壁 ^{へき} 留 ^{とど} 秦 ^{しん} 城 ^{しろ}
	不 ^{ざん} レ ^バ 入 ^い 、 ^{しん} 臣 ^{しん} 請 ^こ 請 ^こ 完 ^ま 壁 ^{へき} 歸 ^{かへ} 趙 ^{てう} 趙 ^{てう} 王 ^{わう} 於 ^お 是 ^こ 是 ^こ 遂 ^{つひ} 遣 ^し 相 ^{しやう} 如 ^{じよ}
	奉 ^{ほう} 壁 ^{へき} 西 ^{にし} 入 ^い 秦 ^{しん} 秦 ^{しん} 王 ^{わう} 坐 ^ざ 章 ^{しやう} 台 ^{たい} 見 ^み 相 ^{しやう} 如 ^{じよ} 相 ^{しやう} 如 ^{じよ} 奉 ^{ほう}
	壁 ^{へき} 秦 ^{しん} 王 ^{わう} 大 ^{おほ} 喜 ^{よろこ} 、 ^{つた} 伝 ^へ 以 ^も 示 ^{しめ} 美 ^び 人 ^{じん} 及 ^{およ} 左 ^さ 右 ^う
	左 ^さ 右 ^う 皆 ^{みな} 呼 ^よ 呼 ^よ 万 ^{ばん} 歲 ^{ざい} 相 ^{しやう} 如 ^{じよ} 視 ^み 秦 ^{しん} 王 ^{わう} 無 ^な 意 ^い 償 ^{つぐな} 趙 ^{てう} 城 ^{しろ}
	乃 ^{すなは} 前 ^{まへ} 曰 ^{いは} 、 ^{あり} 壁 ^{へき} 有 ^{あり} 瑕 ^{きず} 。請 ^こ 指 ^し 示 ^し 王 ^{わう} 王 ^{わう} 授 ^{さづ} 壁 ^{へき} 相 ^{しやう} 如 ^{じよ} 因 ^よ
	持 ^も 壁 ^{へき} 、 ^{きやく} 卻 ^{きやく} 立 ^{りつ} 倚 ^{より} 柱 ^{はしら} 、 ^{はつ} 怒 ^ど 髮 ^{はつ} 上 ^{のぼ} 冲 ^つ 冠 ^{かんむり} 。謂 ^い 秦 ^{しん} 王 ^{わう} 曰 ^{いは} 、 ^{だい} 大
	王 ^{わう} 欲 ^{ほつ} 得 ^え 壁 ^{へき} 、 ^{しむ} 使 ^{しむ} 三 ^{さん} 人 ^{にん} 發 ^{はつ} 書 ^{しよ} 至 ^{いた} 趙 ^{てう} 王 ^{わう} 趙 ^{てう} 王 ^{わう} 悉 ^{しつ} 召 ^め 群 ^{ぐん}
	臣 ^{しん} 一 ^{いつ} 議 ^ぎ 皆 ^{みな} 曰 ^{いは} 、 ^{しん} 秦 ^{しん} 貪 ^{たん} 負 ^{たの} 其 ^{その} 疆 ^{つよ} 、 ^{もつ} 以 ^{もつ} 空 ^{くう} 言 ^{げん} 一 ^{いつ} 求 ^{もと} 壁 ^{へき} 。償 ^{しやう} 城 ^{しろ}
	恐 ^{おそ} 不 ^レ 可 ^レ 得 ^う 議 ^ぎ 不 ^ず 欲 ^{ほつ} 予 ^{あた} 秦 ^{しん} 壁 ^{へき} 臣 ^{しん} 以 ^{おも} 為 ^へ 布 ^ふ 衣 ^い 之 ^の
	交 ^{まじ} 、 ^な 尚 ^な 不 ^ず 相 ^{あひ} 欺 ^{あざむ} 。况 ^{いは} 大 ^{たい} 国 ^{こく} 乎 ^や 。且 ^{かつ} 以 ^{もつ} 一 ^{いつ} 壁 ^{へき} 之 ^の 故 ^{ゆゑ} 、 ^{さか} 逆 ^{さか}
	疆 ^{きやう} 秦 ^{しん} 之 ^の 驩 ^{くわん} 、 ^ふ 不 ^ふ 可 ^か 於 ^お 是 ^こ 、 ^{てう} 趙 ^{てう} 王 ^{わう} 乃 ^{すなは} 齋 ^{さい} 戒 ^{かい} 五 ^{いつ} 日 ^{にち} 、 ^{しめ} 使 ^{しめ}

四面楚歌

臣しん奉ほう璧へき、拜はい送そう書しよ於於庭てい何な者ん嚴えん大たい國こく之の威み以もつ
 修おさ敬けい也なり。今いま臣しん至いた大たい王わう見み臣しん列れつ觀くわん禮れい節せつ甚はな倨おこ
 得う璧へき傳つた之これ美び人じん以もつ戲ぎ弄ろう臣しん一いち臣しん觀くわん大たい王わう無な意い
 償つぐ趙てう王わう城じやう邑いふ故ゆゑ臣しん復また取と璧へき大たい王わう必かな欲ほつ急き臣しん
 臣しん頭かう今いま与と璧へき俱とも碎くだ於於柱はしら矣なり。相しやう如じよ持も其そ璧へき一いち睨にら
 柱はしら、欲ほつ以もつ擊う柱はしら。

四面楚歌

四面楚歌

〔史記〕「項羽本紀」

項王軍壁垓下兵少食盡漢軍及諸侯兵圍之數重夜聞
 漢軍四面皆楚歌項王乃大驚曰漢皆已得楚乎是何楚
 人之多也項王則夜起飲帳中有美人名虞常幸從駿馬
 名騅常騎之於是項王乃悲歌忼慨自爲詩曰力拔山兮
 氣蓋世時不利兮騅不逝騅不逝兮可奈何虞兮虞兮奈

若何歌數闕美人之和項王泣數行下左右皆泣莫能仰

視

項王軍壁垓下。兵少食盡。漢軍及諸侯兵、

圍之。數重。夜聞二漢軍四面皆楚歌。項王乃

大驚曰、「漢皆已得楚乎。是何楚人之多也。」

項王則夜起飲二帳中。有二美人、名虞、常幸從。

駿馬、名騅、常騎之。於是項王乃悲歌忼慨

自為詩曰、

力拔山兮氣蓋世。時不利兮騅不逝。

騅不逝兮可奈何。虞兮虞兮奈若何。

歌數闕、美人之和。項王泣數行下。左右皆

泣。莫能仰視。

漢文学 散文

十八

春夜宴桃李園序

春夜宴桃李園序

李白

夫天地者萬物之逆旅光陰者百代之過客而浮生若夢
 為歡幾何古人秉燭夜遊良有以也況陽春召我以煙景
 大塊假我以文章會桃李之芳園序天倫之樂事群季俊
 秀皆為惠連吾人詠歌獨慚康樂幽賞未已高談轉清開
 瓊筵以坐華飛羽觴而醉月不有佳作何伸雅懷如詩不
 成罰依金谷酒數

夫天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過

客。而浮生若夢、為歡幾何。古人秉燭夜遊、

良有以也。況陽春召我、以煙景、大塊、飯我

以文章、會桃李之芳園、序天倫之樂事、群

季俊秀、皆為惠連、吾人詠歌、獨慚康樂、幽

賞しやう未いまレ已や、高かう談だん 軫うた 清きよ 開ひら 瓊けい 筵えん 以もつ 坐ざ 華はな、飛と 二羽ふたう 觴しやう
 而 醉スイ 月つき。不ズ 有オン 二佳か 作さく、何なん 伸の 二雅が 懷くわい 一 如も 詩し 不ズ 成な、罰ばつ
 依よ 二金らん 谷こ 酒しゆ 数すう 一 二

雜說

雜說

韓愈

世有伯樂然後有千里馬千里馬常有而伯樂不常有故
 雖有名馬祇辱於奴隸人之手駢死於槽櫪之間不以千
 里稱也馬之千里者一食或盡粟一石食馬者不知其能
 千里而食也是馬也雖有千里之能食不飽力不足才美
 不外見且欲與常馬等不可得安求其能千里也策之不
 以其道食之不能盡其材鳴之而不能通其意執策而臨
 之曰天下無馬嗚呼其真無馬邪其真不知馬也

世よ 有あり 二伯はく 樂らく、然しか 後のち 有あり 二千せん 里り 馬うま 一 千せん 里り 馬うま 常つね 有あり 而しか

名二子説

伯樂不常有一故雖有二名馬一祇辱於奴隸人
 之手一駢死於槽櫪之間一不下以二千里一稱上也。馬
 之千里者一食或尽二粟一石一食馬者一不下知二
 其能千里而食上也。是馬也、雖有二千里之能一
 食不飽、力不足、才美不_レ外見一且欲_レ与_二常馬一
 等上、不_レ可_レ得。安求_二其能千里一也。策_レ之_レ不_レ以_二其
 道一、食_レ之_レ不_レ能_レ尽_二其材一、鳴_レ之_レ而_レ不_レ能_レ通_二其意一
 執_レ策而臨_レ之曰、「天下無_レ馬。」嗚呼、其真無_レ馬
 邪、其真不_レ知_レ馬也。

名二子説

名二子一説

蘇洵

輪輻蓋軫皆有職乎車而軾獨若無所為者雖然去軾則
 吾未見其為完車也軾乎吾懼汝之不_レ外飾也天下之車

莫不由轍而言車之功者轍不與焉雖然車仆馬斃而患亦不及轍是轍者善處乎禍福之間也轍乎吾知免矣

輪・輻・蓋・軫、皆有職乎車而軾、獨若無所為

者一。雖然、去軾、則吾未見其為完車也。軾乎、

吾懼汝之不_二外飾也。天下之車、莫不由轍。

而言_二車之功者、轍不_レ與焉。雖然、車仆馬斃、

而患亦不_レ及轍。是轍者善_二處乎禍福之間_一

也。轍乎、吾知_レ免矣。

論語

子曰學而時習之不亦說乎有朋自遠方來不亦樂乎人不知而不愠不亦君子乎 學而

子曰、「學而時習之、不亦說乎。有朋自遠方

論語 爲政

来きたル、不ず亦また樂たのシカラ一や乎ひと。人ひと不サシテ知シラ而不不ず慍うらミ、不ず亦また君くん子シナラ一や乎ト。」

子曰巧言令色鮮矣仁學而

子シ曰いはク、一か巧かう言げん令れい色しよく鮮すくなシ矣仁ト。」

子曰吾十有五而志于學三十而立四十而不惑五十而

知天命六十而耳順七十而從心所欲不踰矩爲政

子シ曰いはク、一われ吾われ十じふ有いう五ご而ニシテ志こころをス于ニ學がくニ三さん十じふ而ニシテ立たツ。四し十じふ

而不不ず惑まどハ。五ご十じふ而ニシテ知シル二てん天めいヲ命ろく一ご六じふ十じふ而ニシテ耳みみ順したがフ。七しち十じふ

而從從したがヒテ二こころノ心こころ所ところニ欲ほつスル、不サト踰こエ矩のりヲ。」

子曰温故而知新可以爲師矣爲政

子シ曰いはク、一あたたまテ温あたたマテ故ふるキヲ而知知シレバ新あたらしキヲ、可べシト以もつテ為た師シ矣。。」

子曰學而不思則罔思而不學則殆爲政

子シ曰いはク、一まなビテ學まなビテ而不不レ思おもハ則すなはチ罔くらシ思おもヒテ而不不レ學まなバ則すなはチ殆あやふシト。」

子曰由誨女知之乎知之爲知之不知爲不知是知也爲政

子曰「由、誨ニ女知レ之乎。知レ之爲レ知レ之、不レ知レ爲レ

不レ知レ是知也。」

子曰德不孤必有隣里仁

子曰「徳不レ孤。必_○有レ隣。」

子曰知之者不如好之者好之者不如樂之者雍也

子曰「知レ之者、不レ如ニ好レ之者。好レ之者、不レ如ニ樂レ

之者。」

子曰君子和而不同小人同而不和子路

子曰「君子和_○而_○不_○同、小人同_○而_○不_○和。」

子曰剛毅木訥近仁子路

子曰「剛毅木訥、近レ仁。」

漢文学 散文

論語 里仁 雍也 子路

廿一

子貢問曰有一言而可以終身行之者乎子曰其恕乎己
所不欲勿施於人 衛靈公

子貢問曰、「有一言而可以終身行之者乎。」

子曰、「其恕乎。己所不欲、勿施於人。」

子曰過而不改是謂過矣 衛靈公

子曰、「過而不改、是謂過矣。」

孟子 四端 孟子 四端 『孟子』「公孫丑」上

孟子曰人皆有不忍人之心先王有不忍人之心斯有不
忍人之政矣以不忍人之心行不忍人之政治天下可運
之掌上所以謂人皆有不忍人之心者今人乍見孺子將
入於井皆有怵惕惻隱之心非所以內交於孺子之父母
也非所以要譽於鄉黨朋友也非惡其聲而然也由是觀

之無惻隱之心非人也無羞惡之心非人也無辭讓之心
 非人也無是非之心非人也惻隱之心仁之端也羞惡之
 心義之端也辭讓之心禮之端也是非之心智之端也人
 之有是四端也猶其有四體也有是四端而自謂不能者
 自賊者也謂其君不能者賊其君者也凡有四端於我者
 知皆擴而充之矣若火之始然泉之始達苟能充之足以
 保四海苟不充之不足以事父母

孟子曰、一人皆有不忍人之心。先王有不忍人之心

人之、心、斯有、不忍人之政一矣。以、不忍人之

心、行、不、忍人之政、治、天下、可、運、之、掌上。所

以、謂、三人、皆有、不忍人之、心、者、今、人、乍、見、孺

子、將、入、於、井、皆、有、二、怵、惕、惻、隱、之、心、非、四、所、以

内ニ交於孺子之父母也。非所_三以要_二誉於郷

党・朋友也。非下_二惡_一其声_一而然也。由_レ是觀_レ之、無_二

惻隱之心_一非人也。無_二羞惡_一之心_一非人也。無_二

辭讓之心_一非人也。無_二是非_一之心_一非人也。惻

隱之心_一仁之端也。羞惡之心_一義之端也。辭

讓之心_一禮之端也。是非之心_一智之端也。人

之有_二是四端_一也、猶_キ其有_二四體_一也。有_二是四端_一、

而自謂_レ不能_レ者也。謂_二其君不_レ能_レ者、

賊_二其君_一者也。凡有_三四端_二於我_一者、知_二皆_レ擴_レ而

充_レ之矣。若_二火_一之始_レ然、泉之始_レ達_一。苟能_レ充_レ之、

足_三以保_二四海_一、苟不_レ充_レ之、不_レ足_三以事_二父母_一」

性惡說

性惡說

〔荀子〕「性惡」

人之性惡其善者偽也今人之性生而有好利焉順是故
爭奪生而辭讓亡焉生而有疾惡焉順是故殘賊生而忠
信亡焉生而有耳目之欲有好聲色焉順是故淫亂生而
禮義文理亡焉然則從人之性順人之情必出於爭奪合
於犯分亂理而歸於暴故必將有師法之化禮義之道然
後出於辭讓合於文理而歸於治用此觀之然則人之性
惡明矣其善者偽也故拘木必將待隳栝烝矯然後直鈍
金必將待礪厲然後利今人之性惡必將待師法然後正
得禮義然後治今人無師法則偏險而不正無禮義則悖
亂而不治古者聖王以人之性惡以爲偏險而不正悖亂
而不治是以爲之起禮義制法度以矯飾人之情性而正
之以擾化人之情性而導之也使皆出於治合於道者也

今之人化師法積文學道禮義者爲君子縱性情安恣睢而違禮義者爲小人用此觀之然則人之性惡明矣其善者偽也

人之性惡、其善者偽也。今人之性生而有
好利焉。順是、故爭奪生而辭讓亡焉。生而
有疾惡焉。順是、故殘賊生而忠信亡焉。生
而有耳目之欲、有好色焉。順是、故淫亂
生而禮義文理亡焉。然則從人之性、順人
之情、必出於爭奪、合於犯分亂理、而歸於
暴。故必將下有師法之化、禮義之道、然後出
於辭讓、合於文理、而歸於治。用此觀之、然
則人之性惡明矣、其善者偽也。故拘木必

將^{まさ}下^ニ待^{まち}二 隳^{いん} 栝^{くわつ} 烝^{じょう} 矯^{けう}一、然^{しか} 後^{のち} 直^{なほ}上^{カント}、鈍^{どん} 金^{きん} 必^{かなら} 將^{まさ}下^ニ 待^{まち}二 師^し 法^{はふ}一、然^{しか} 後^{のち} 正^{ただ}、
 然^{しか} 後^{のち} 利^り上^{カント} 今^{いま} 人^{ひと} 之^の 性^{せい} 惡^{あく} 必^{かなら} 將^{まさ}下^ニ 待^{まち}二 師^し 法^{はふ}一、然^{しか} 後^{のち} 正^{ただ}、
 得^え二 礼^{らい} 義^ぎ一、然^{しか} 後^{のち} 治^ち上^{カント} 今^{いま} 人^{ひと} 無^な二 師^し 法^{はふ}一、則^{すなは} 偏^{へん} 險^{けん} 而^{ニシテ} 不^ず
 正^{ただ}、無^な二 礼^{らい} 義^ぎ一、則^{すなは} 悖^{はい} 乱^{らん} 而^{ニシテ} 不^ず 治^ち。古^{いに} 者^{しえ} 聖^{せい} 王^{わう}、以^{もつ}二 人^{ひと}
 之^の 性^{せい} 惡^{あく}一、以^{もつ} 為^な 偏^{へん} 險^{けん} 而^{ニシテ} 不^ず 正^{ただ}、悖^{はい} 乱^{らん} 而^{ニシテ} 不^ず 治^ち、是^{こゝ}
 以^{もつ} 為^な 起^{おこ}二 礼^{らい} 義^ぎ一、制^{せい} 法^{はふ} 度^ど一、以^{もつ} 矯^{けう} 飾^{しやく} 人^{ひと} 之^の 情^{じやう} 性^{せい} 一
 而^た 正^{ただ} 之^{これ}、以^{もつ} 擾^{ぜう} 化^{くわ} 人^{ひと} 之^の 情^{じやう} 性^{せい} 一 而^{ニシテ} 導^{みちび} 之^{これ} 也^{なり}。使^し 下^{くだ} 皆^{みな}
 出^い 於^よ 治^ち 一 合^{がっ} 中^{ちゆう} 於^よ 道^{だう} 上^{じやう} 者^{もの} 也^{なり}。今^{いま} 之^の 人^{ひと}、化^{くわ} 二 師^し 法^{はふ}一、積^つ 二 文^{ぶん}
 学^{がく} 一、道^{だう} 二 礼^{らい} 義^ぎ一 者^{もの}、為^な 二 君^{くん} 子^し 一。縱^{はしい} 二 性^{せい} 情^{じやう} 一、安^{やす} 二 恣^し 睢^き 一、而^た 違^{たが} 二
 礼^{らい} 義^ぎ 一 者^{もの} 為^な 二 小^{せう} 人^{じん} 一。用^{もつ} 此^{これ} 觀^{みる} 之^{これ}、然^{しか} 則^{すなは} 人^{ひと} 之^の 性^{せい} 惡^{あく}
 明^{あき} 矣^{けし}、其^そ 善^{ぜん} 者^{もの} 偽^み 也^{なり}。

老子 第十一章

漢文学 散文 老子 第十一章

三十輻共一轂當其無有車之用埏埴以為器當其無有器之用鑿戶牖以為室當其無有室之用故有之以為利無之以為用

三十輻、共一轂、當其無、有二車之用、埏埴、以為器、當其無、有二室之用、故有之以為利、無之以為用。

莊子 渾沌

莊子 渾沌

〔莊子〕「應帝王」

南海之帝為儵北海之帝為忽中央之帝為渾沌儵與忽時相與遇於渾沌之地渾沌待之甚善儵與忽謀報渾沌之德曰人皆有七竅以視聽食息此獨無有嘗試鑿之日鑿一竅七日而渾沌死

南^{なん}海^{かい}之^の帝^{てい}為^な儵^{しゆく}、北^{ほつ}海^{かい}之^の帝^{てい}為^な忽^{こつ}、中^{ちゆう}央^{あう}之^の帝^{てい}。
 為^な二^ス渾^{こん}沌^{どん}一^ト。儵^{しゆく}与^と忽^{こつ}時^{とき}相^{あひ}与^{とも}遇^{あふ}二^ア於^コ渾^{こん}沌^{どん}之^の地^ち一^ニ渾^{こん}。
 沌^{どん}待^{たい}レ之^{これヲ}甚^{はなはダ}善^{よし}。儵^{しゆく}与^と忽^{こつ}謀^{はかる}レ報^{むく}二^{イン}渾^{こん}沌^{どん}之^の德^{とく}一^ニ。曰^{いはク}、「人^{ひと}皆^{みな}有^{あり}二^ニ七^{しち}竅^{けう}、以^{もつ}視^し聽^{ちやう}食^{しよく}息^{そく}。此^{これ}独^{ひと}無^{なし}レ有^{ある}。嘗^こ試^{みる}鑿^ミレ之^{これヲ}。」日^ひ鑿^う二^ニ一^{いち}竅^{けう}一^ニ。七^{なな}日^か而^{ニシテ}渾^{こん}沌^{どん}死^し。○

曳尾於塗中 曳^ひ尾^び於^コ塗^と中^{ちゆう} (『莊子』「秋水」)

莊^{ちゆう}子^し釣^つ於^コ濮^{ぼく}水^{すい}。楚^そ王^{わう}使^し二^ニ大^{たい}夫^ふ一^ニ人^{ひと}往^ゆ先^{せん}焉^{んせ}。曰^{いはク}願^{ねん}以^{もつ}竟^{けい}内^{ない}累^{らい}矣^{なり}。莊^{ちゆう}子^し持^ぢ竿^{かん}不^ず顧^こ曰^{いはク}吾^{われ}聞^き楚^そ有^{あり}神^{しん}龜^き死^し已^に三^{さん}千^{せん}歲^{さい}矣^{なり}。王^{わう}巾^{きん}笥^き而^{もつ}藏^{かく}之^{これヲ}廟^{べう}堂^{たう}之^の上^{じやう}。此^{これ}龜^き者^{もの}寧^{ねい}其^{その}死^し為^な留^{りゆう}骨^{こつ}而^{もつ}貴^き乎^や。寧^{ねい}其^{その}生^{せい}而^{もつ}曳^ひ於^コ尾^び塗^と中^{ちゆう}。莊^{ちゆう}子^し曰^{いはク}往^ゆ矣^{なり}。吾^{われ}將^{まさ}曳^ひ尾^び於^コ塗^と中^{ちゆう}。○

漢^{かん}文^{ぶん}學^{がく} 散^{さん}文^{ぶん} 莊^{ちゆう}子^し 釣^つ二^ニ於^コ濮^{ぼく}水^{すい}一^ニ。楚^そ王^{わう}使^し二^ニ大^{たい}夫^ふ一^ニ人^{ひと}往^ゆ先^{せん}焉^{んせ}。○
 廿五

曰、願以二境内一累矣。莊子持竿不顧曰、「吾聞、」

楚有ニ神龜一、死已三千年矣。王巾笥而藏之

廟堂之上。此龜者、寧其死為ニ留骨而貴乎、

寧其生而曳ニ尾於塗中一乎。」二大夫曰、「寧生

而曳ニ尾於塗中一。」莊子曰、「往矣。吾將ト曳ニ尾於

塗中。」

一、漢詩の構造について

漢詩は、中国文学のうちでも、日本文学に最も大きな影響を与えたもの一つです。日本の代表的な韻文を「詩歌（漢詩と和歌）」というように、本来「詩」とは即ち漢詩のことを指しました。また、日本人にとつて漢詩は、単に外国文学として鑑賞するだけのものではなく、自ら作詩するものでもありました。上古から近代（明治）に至るまで、漢詩は日本文学における「ジャンル」として確立された文学形式だったのです。

ただし、日本では、ほとんど書物によって中国の文学を受容してきました。日本語と中国語はまったく異なる体系の言語であり、音韻の体系も大きく異なります。語法的な面はともかく、表音文字ではない漢字が実際どのように発音されるのかは、文字だけでは知ることは不可能です。日本の漢詩人の多くは、それぞれの漢字が実際どのように発音されるのかは知りませんでした。韻文というのは洋の東西を問わず、読まれた内容以上に、それを構成する音声の美しさがより重要なポイントとなつてきます。特に中国の韻文では、その音声の配列の美しさを重視します。中国語の発音に通じない日本人が漢詩を詠むことなど一見不可能といえます。

日本の漢詩人たちがこうした難点を克服できたのには、二つの大きな理由があります。まず、六朝^{りく}末から唐代にかけて中国で音韻体系の整備が行なわれ、すべての文字がその音韻の種類によつて厳密に分類されたこと。そして、これを受けて唐代に、韻律上美しいと感じられる音韻配列の規則が定め

られ、新しい詩形である律詩（絶句）という、いわゆる今体詩（近体詩）のスタイルが完成されたことです。今体詩の規則は、実際の中国音を知らない外国人でも、書物による音韻の分類の知識さえあれば、何とか対応できる程度のものでした。日本人は今体詩において初めて、中国音的に整った漢詩を詠むことが可能となったのです。

① 四声・平仄

中国語というのは、一語（二字）一音節の言語です。また、それぞれの語の音節は、声調（Tone）と呼ばれる固有の音調を伴っており、語意の違いと厳密な関係を持っています。例えば「為」という字は、「する（行^レ為）」という意味を表す場合と、「くのため」という意味を表す場合とは、声調が異なります。声調は詩において、まず押韻（脚韻を踏む）に関係します。押韻は、中国のあらゆる韻文においての大原則で、押韻される文字は、同一の韻母（母音）であるだけでなく、同一の声調であることも条件となります。

声調の区別が明確に意識されるようになったのは、だいたい梁^{りやう}代（502～557）の頃で、一説には梁の文人沈約^{しんやく}（441～513）に始まると言われています。しかし、梁以前の詩人たちは、自らの言語経験に即して、正しく押韻しています。もつとも、押韻以外では特に声調による拘束はなく、それぞれの詩人が自らの裁量によつて美しいと感じられる韻律となるよう、字句を配列していました。

唐代の声調には、「平声^{ひやう}」「上声^{じやう}」「去声^{きやう}」「入声^{にゅう}」の四種、いわゆる「四声」があり、全ての文字は、韻母と四声の違いによつて二百六韻に

分類されました。今体詩の規則はこの四声の区別に基づいており、四声を平声と仄声（上声・去声・入声）の二種類に分け、各句においてそれぞれ平声と仄声を配列すべき箇所が厳密に定められていました。どういう理由で上声・去声・入声を仄声としたのかはよく分かっていませんが、この平仄という考え方は、唐以後に新たに生まれたすべての韻文に継承されていきます。

唐代の音韻体系は宋代以後に徐々に変化していきました。最も大きな変化は、入声が消失してしまったことです。入声は他の三つの声調に比べて短く詰まり、ㄐ・ㄌ・ㄴの子音で終わる音です。宋以後このㄐ・ㄌ・ㄴがしだいに弱まり、元代においては完全に脱落した結果、唐代に入声として分類されていたものは、平声・上声・去声のいずれかの音に変化してしまいました。唐以後に成立した韻文形式、例えば五代・宋の「詞」や元の「曲」は、それぞれの時代の音韻に従った韻の分類に従って作られています。

ただし、詩に限っては、依然として唐代の音韻体系に従って作られ続けました。入声が消失した元以降も、詩作においては入声をきちんと意識して字句を配列し、韻を踏みました。その意味では実際の中国音を知らず、ただ書物による知識のみで詩を作った日本の詩人と変わらないようにも思えますが、変化したとは言え同じ中国語ですので、事情は大きく異なります。

日本人が漢詩を読む場合には、紙の上に書かれた文字の並びとは別に、行きつ戻りつしながら訓読していきます。中国人の場合には、発音は異なるにしても、文字の並びに従って中国音で読んでいきます。詩作においても日本人は、いったん日本語（訓読）で考えた上で、中国語の語順に文字を並べなおす場合も多いのですが、中国人はそういった無理をする必要はありません。なにより、音韻体系の歴史的变化に拘りすぎれば、現代の日本人でも平安朝

に詠まれた和歌を鑑賞することはできないということになってしまいます。

現代中国において標準語とされている「普通話（フートンホア）」は、北京を中心とした北方中国語を基本に定められたものですが、その声調から唐代の四声を類推することができます。「普通話」はやはり四種類の声調（第1声、第2声、第3声、第4声）を持っており、第1・2声は平声に、第3声は上声に、第4声は去声に、ほぼ重なります。とすれば、第1〜4声に混入してしまった入声の文字だけを覚えればよいことになります。

また、日本の漢字音も唐代音の類推に役立ちます。日本漢字音の中心である漢音は、唐の国都長安や洛陽の音を基準にしており、特に現代中国音では消失してしまっている入声を保存している点は重要です。これは俗に「フツクチキ」と呼ばれるもので、「十（シフ）」のように歴史的仮名遣いでは「フ」で終る音はㄐ入声、「日（ジツ）」や「八（ハチ）」のように「ツ・チ」で終る音はㄌ入声、「百（ヒヤク）」や「敵（テキ）」のように「ク・キ」で終る音はㄴ入声を表しています。すなわち、現代中国語と日本語の音についての知識があれば、唐代の四声の識別は可能ということになります。

② 今体詩の規則

今体詩には、韻律上の厳格な規則があります。律詩とは要するに、律（規則）のある詩のことです。それでは、日本人が今体詩を鑑賞する場合、それらの規則をどの程度知っておく必要があるのでしょうか。

・ 絶句は四句からなり、第一〜四句を「起句・承句・転句・結句」と呼ぶ。
律詩は八句からなり、二句を一聯（一対）とし、第一〜四聯を「首聯・頷聯・頸聯・尾聯」と呼ぶ。なお、詩においては二句一聯を基本単位とし、絶

句においても起句と承句、転句と結句を一つの聯として意識している。

・各句の字数は一定で、基本的に五言か七言である。

・偶数句で押韻する（隔句韻）。七言詩の場合には、第一句目で押韻する場合もある。今体詩の押韻は必ず平声を用いる。

・音韻的かつ意味的な区切りとして、五言詩では二字目と三字目の間に、七言詩では二字目と三字目・四字目と五字目の間に小休止がある。

・律詩では、領聯と頸聯では必ず対句を用いる。首聯では対句となる場合もあるが、尾聯は対句にしない。絶句では、起承や転結が対句となる場合もあるが、特に対句を用いる必要はない。

中学校や高等学校の教学の場合でも、以上のような点については教授されているようです。ただし、実際に詩を作るのであれば、これだけでは不十分で、次のような音韻上の諸規則も知っておかなければなりません。

① 「二四不同」「二六対」

各句の二字目と四字目の平仄は逆にする。七言詩ではさらに一字目と六字目の平仄を同じにする。ただし、七言絶句の転句では例外的に、五字目と六字目の平仄が入れ替わり、二六対とならなくてもよい。

② 「二三連禁」

各句の下三字に平声が連続してはいけない（下三平）。また、絶句の転句では仄声の連続も避ける（下三仄）。

③ 「孤平」

五言詩では二字目、七言詩では四字目が平声の場合、前後どちらも仄声にしてはいけない。ただし、①に示した七言絶句転句の例外に限り、孤平が生じてもよい。

④ 冒韻

押韻以外では同一の韻に属する字を使つてはいけない。なお、今体詩、特に律詩の押韻には平声を用いるのが原則であり、押韻しない句の句末の字は仄声でなければならない。

⑤ 粘法な・反法

一聯として対応する二句において、偶数字目の平仄は逆にする（反法）。さらに、後に続く聯の一句目の偶数字目の平仄は、その前の句の平仄と同じにする（粘法）。例を示せば、次のようになる（平声を○、仄声を●、韻字を◎で、その他を×で示す）。

五言詩

七言詩

× ● × ○ ●	× ○ × ● × ○ ●
× ○ × ● ◎	× ● × ○ × ● ◎
× ○ × ● ●	× ● × ○ × ● ●
× ● × ○ ◎	× ○ × ● × ○ ◎

律詩の場合には、前半の首聯・領聯と後半の頸聯・尾聯が同じ平仄の形式となる。

以上が今体詩の規則です。一見、ひじょうに面倒な規則に思えますが、四句、八句と句の数が少なく、一句の字数が五言か七言に統一されており、また平仄の規則も全ての文字について適用されるわけではないので、字書や作詩のための参考書を用いれば、外国人にも何とか対応できます。詞や曲などの韻文は、実際に旋律にのせて歌われることを前提としており、旋律の種類ごとに多種多様な形式がありました。一句の字数は短いものでは四句から、長いものでは数十句に及ぶものまであり、各句の字数もまちまちで、各文字

の平仄も細かく定められていました。したがって、実際の発音を知らないで作ることは不可能です。また、主に唐以前の六朝期の詩体を今体詩に対して「古詩（古体詩）」と呼びますが、古詩には今体詩のような平仄による厳密な規則はありません。したがって、古詩の韻律上の美しさは、それぞれの詩人の裁量に任されることになり、詞や曲とは逆の意味で、中国語の音声に精通していないとまともな詩は詠めないことになります。

日本人の作る漢詩がほとんど今体詩に限られていたのは、このような理由によります。「平仄を整える」という言葉は、漢詩がほとんど作られなくなった現代では死語となってしまうました。しかし、かつての日本の漢詩人たちは、書物による知識によって「平仄を整え」、形式の整った律詩や絶句を詠んできたのです。

(3) 日本人の漢詩

日本人が漢詩を作る場合には、最終的には訓読されることを意識しました。むしろ、訓読されることについてはじめて、漢詩は日本文学の「ジャンル」となりえたとも言えます。中国人の詠んだ詩であっても、訓読する限りは原音の美しさを感じることはとうてい不可能です。ただその反面、日本語の音声としてはできるだけ詩的に聞こえるように、訓読を工夫してきました。例えば、李白の「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」は、中学校の国語教科書のほとんどこに載せられているほど有名な七言絶句です。この詩の結句「唯見長江天際流」は、これが散文であるなら「ただ長江の天際に流るるを見るのみ」と訓読されるはずですが、伝統的に「ただ見る長江の天際に流るるを」と訓読されてきました。江戸時代後期に生まれた詩吟も、漢詩訓読へのこだ

わりから生まれたものだと言えます。

頼山陽の「天草洋に泊す」は、三省堂の高校の「古典B」の教科書に載せられているように、日本の漢詩の中でも、特に有名なもののひとつです。

泊天草洋 天草洋に泊す

雲耶山耶呉耶越 雲か山か 呉か越か

水天髻鬢青一髮 水天髻鬢 青一髮

萬里泊舟天草洋 萬里舟を泊す 天草の洋

烟横篷窓日漸没 烟は篷窓に横たはりて 日漸く没す

瞥見大魚波間跳 瞥見す 大魚の波間に跳るを

太白当船明似月 太白 船に当たりて明月に似たり

この詩の眼目は、第二・二句、特に「雲耶山耶呉耶越」にあります。しかも、「雲か山か呉か越か」と訓読されることによって始めて価値を持つてくるのです。まず前半で、「クモカ・ヤマカ」と三音が繰り返されます。そして後半で「ゴカ」という二音を挟むことによって、短い休止を意識させ、再び「エツカ」という三音を締めくくります。つまり、「33休(7)、23(5)」という一種の七五調であり、日本語としては、たいへん口調のよい句なのです。

しかしこの句は、中国語の詩という観点からは、大きな批判を受けている句でもあります。この詩は七言古詩です。先に述べたように、古詩には今体詩のような平仄の規則はありません。しかし、規則がないからこそ、個々の詩人はそれぞれの美意識にしたがって、美しい韻律になるように字句の配列を心がけたのです。中国語の発音には声調があり、それによって生み出される音声の曲折の美しさ面白さが、中国の詩の価値を決定します。「雲耶山耶呉耶越」の平仄は「平平平平平仄仄」であり、三平どころか平声が六つも連続

してしまいます。中国語の音声の面から評価すれば、何の曲折もなく、とても詩とは呼べないような平板な駄文であると言わざるを得ません。

頼山陽は恐らく、まず「くもか、やまか、ごか、えつか」という訓読を思いついたのでしょうか。ただ、これを漢字に直しても、とつてい律詩や絶句とはなりえません。そのため、平仄に縛られない古詩という形式を選択することにしたのではないのでしょうか。この詩は、単に第二、六句だけを見れば、詩としてはまとまっているものの、常套句を並べただけの凡庸な作品に過ぎません。

律詩や絶句についても、日本人は訓読の発想からさかのぼって漢詩を作る場合が少なくなかったでしょう。「平仄を整える」という言葉が残っているのも、そうしたことの表れだと思われまます。つまり、口調の良い訓読を思いつき、これを漢字に直す過程で、平仄に合うよう文字を選びなおすわけです。漢詩を外国文学という面からのみ捉えれば、訓読によって漢詩を読み、訓読の発想によって漢詩を作るといのは、邪道と言えるかもしれません。しかし、千年以上にもわたって、日本人はそうやって漢詩とつきあってきました。現在日本では、比較的容易に中国語を学び、話すことができるようになりました。だからといって、ただちに訓読を捨て去って、中国音で音読すべきだ、という意見もまた性急過ぎるのではないのでしょうか。

二、漢文を理解するための基本資料

(1) 概説書

漢文を勉強する上で、それぞれの分野の基礎的な知識は欠かせません。ここでは、①最近出版されたもの、②日本語によるもの、③索引や参考文献が付いているもの、を中心に分野別に挙げておきました。

1-1 歴史・考古

中国の歴史をほとんど勉強されたことのない方は、まず高校の世界史の教科書、例えば、

『詳説世界史』 山川出版社

などの関連部分をお読み下さい。大きな書店ならば、この教科書は市販していると思います。特に中国史だけを書いた単行書としては、

岸本美緒『中国の歴史』ちくま学芸文庫、2015（初出2007）

が比較的新しく、よくまとまっていると思います。基礎的な知識の上に立つて読む概説書としては、

宮崎市定^も『中国史』上下、岩波全書295、1977（『宮崎市定全集』第1巻「中国史」）、岩波書店、1988、に再録）

が第一です。個人の執筆による中国史の概説書として、最も簡にして要を得たもので、独創的な中国史観は大きな影響を与えています。この他には、

尾形勇ほか編『中国史』（新版各国世界史3）山川出版社、1988

があり、多くの参考文献が挙げられています。より詳しいものとしては、

磯波護^もほか編『中国の歴史』全12巻 講談社、2004～2005

などがあり、内容はもとより参考文献も詳しいですが、時代・分野ごとの分担執筆なので、内容・視点・書き方などに違いがあります。

また日中交流の歴史については、日・中双方の研究者による、

大庭脩^もほか編『日中文化交流史叢書』全10巻 大修館書店、1995～1998

があり、歴史や思想などの様々な分野からの検討がなされています。こうした概説の背景にはこれまでに積み上げられてきた研究の成果があるわけですが、そうした先行する研究を知るための解説書としては、

磯波護ほか編『中国歴史研究入門』名古屋大学出版会、2006
があり、中国史の研究のための基礎史料や工具書の解説も詳しいです。

1-2 文学

少し古くなりましたが、

『中国文化叢書』第4巻「文学概論」・第5巻「文学史」大修館、1967・1968
がよくまとまっていると思います。「文学史」が時代順に文学の特質を述べているのに対して、「文学概論」はむしろ文体や作品形式によってその特質を解説し、相補う形になっています。新しいものでは、

興膳宏編『中国文学を学ぶ人のために』世界思想社、1991
があり、また特に宋代以降の文学史については、

藤井省三・大木康『新しい中国文学史』ミネルヴァ書房、1997

九州中国文学会編『わかりやすくおもしろい中国文学講義』中国書店、2002
などがあり、参考文献も新しいです。

1-3 哲学・思想・宗教

かなり古いのですが、

武内義雄『中国思想史』岩波全書73、1967改版（初版1936）

が古典的な名著で、その全体を概観できます。最近刊行されたものでは、

日原利国編『中国思想史』上下、ペリカン社、1967

が、人物伝の集成という体裁をとっており、新しい研究成果や参考文献を知ることが出来ます。その他には、

『中国文化叢書』第2巻「思想概論」第3巻「思想史」・第6巻「宗教」大

修館、1967

本田濟三編『中国哲学を学ぶ人のために』世界思想社、1975

森三樹二郎編『中国思想を学ぶ人のために』世界思想社、1985

加地伸行編『老荘思想を学ぶ人のために』世界思想社、1997

などがあり、『中国文化叢書』第2巻「思想概論」は、思想家の系譜ではなく、「世界観」「人間観」「歴史観」などの大きな枠組みを扱っています。

1-4 言語・文学

大きく漢字の形と音の2つの問題がありますが、その基本的な問題を扱うのが、

貝塚茂樹・小川環樹共編『中国の漢字』（日本語の世界3）中央公論社、1981

で、その拡がりとお興行きを知ることが出来ます。ただ参考文献はほとんど付いていません。

漢字の起源と形についての研究では、

白川静『漢字』岩波新書（青版）747、1970

白川静『漢字の世界』1・2（東洋文庫）平凡社、1976

（いずれも『白川静著作集』1・2、平凡社、1999・2000、に再録）

などをはじめとする白川氏の独創的な研究を忘れることは出来ません。また

藤枝晃『文字の文化史』講談社学術文庫1409、1999（初出は、岩波書店、1971）

は文字と書写材料や社会との関係を幅広く考察しています。

漢字の音については、

頼惟勤編『中国字典を読むために 中国語学史講義』大修館、1996

が、基本的な問題を丁寧に解説しており、

大島正二『漢字と中国人』岩波新書（新赤版）822、2003

は、研究の基礎となる漢字の字書自体を解説しています。また日本における漢字のあり方については、

高島俊男『漢字と日本人』文春新書198、2001

があります。

1-5 芸術・民俗・科学技術など

中国の芸術には、絵画（水墨・版画など）、書・篆刻、彫刻（仏像など）、

陶磁(土器・唐三彩・青白磁・青花など)、工芸(青銅・金銀・漆・玉など)、建築(宮殿・庭園など)、服飾などの様々な分野がありますが、最近出された、古田真一ほか編著『中国の美術』昭和堂、2003

は、バランスよく書かれています。大部な書籍ですが、

『世界美術大全集 東洋編』全3巻別巻1、小学館、1997～2001

は、解説・図版ともに最新の成果を多く取り入れており、参考文献も詳しいです。

民俗・習慣・年中行事などについては、

朱恵良著(筒井茂徳ほか訳)『中国人の生活と文化』二玄社、1994

中村喬『中国の年中行事』『続中国の年中行事』平凡社選書115・134、1988・

1990

があります。

科学技術については、

杜石然(杜石然)ほか著(川原秀城ほか訳)『中国科学技術史』東京大学出版会、1997

がよくまとまっています。この分野には、ジヨゼフ・ニードラムの名著

*Joseph Needham, *Science and Civilization in China*, Cambridge University Press, 1954

がありますが、そのダイジェスト版に、

ロバート・K・G・テンブル(平山輝代訳)『図説中国の科学と文明』河出

書房新社、1992

があつて、興味深い図版が多数あります。

1-6 読書案内

前近代の中国に関連する読書案内は必ずしも多くはありませんが、

高島俊男『独断!中国関係名著案内』・『本と中国と日本人と』東方書店、

1991・ちくま文庫、2004

『中国文化を読む279冊―68の知性によるブックガイド』『月刊 しにか』

1991年5月号、大修館書店 所収

『私のベスト3』『東方』200号記念特別号、東方書店、1997、所収

『中国の歴史と文化を読むブックガイド』『月刊 しにか』2001年5月号、

大修館書店、所収

などがあります。

また、直接の読書案内ではありませんが、これまでの先生方の伝記や研究を紹介した、

江上波夫編『東洋学の系譜』・同編著同第2集・高田時雄編著同欧米篇、大

修館書店、1992・1994・1996

東方学系編『東方学回想』「先学を語る」全6冊「学問の思いで」全3冊、

刀水書房、2000

なども参考になるはずです。

1-7 叢書

日本で出版された中国に関するシリーズ(叢書)を、比較的読みやすいもの

には以下のようなものがあります。

あじあブックス(既刊79冊)大修館、1998

アジア学叢書(既刊311冊)大空社、1996

東方選書(既刊48冊)東方書店、1979

中国人物叢書(第1期12巻、第2期12巻)人物往来社、1966～1967

中国の詩人(全12巻)集英社、1982～1983

中国の人と思想(全12巻)集英社、1984～1985

中国の英傑(全10巻)集英社、1986～1987

中国歴史人物選(全12巻)白帝社、1994～1996

白帝社アジア史選書(既刊12冊)白帝社、2003

中国文化叢書(全10巻)大修館、1967～1971

汲古選書(既刊75冊)汲古書院、1992

- 研文選書 (既刊127冊) 研文出版、1978～
 中国学芸叢書 (全28巻、既刊17冊) 創文社、1996～
 講座道教 (全6巻) 雄山閣出版、1999～2001
 新シノロジー (全3巻) 東方書店、1988
 日中文化交流史叢書 (全10巻) 大修館、1995～1998
 東洋文庫 (既刊884冊) 平凡社、1963～

(2) 字典・辞典・事典

漢字・漢語を調べるためのハンデインな辞典は、

小川環樹^{ほか}編『新字源』(改訂新版) 角川書店、2017 (初版は1968)

です。文字の成り立ち・形・音・意味など、基本的な説明がきちんとなされ、日本語との違いや付録も充実しています。

大きな辞典としては、

諸橋^{もろはし}徹次^{とつぎ}編『大漢和辞典』(修訂版) 全12巻索引1巻、大修館、1989～1990

があります。人名、字号・別称、地名、日本の語彙などを含む百科事典的辞書ですので、『新字源』でわからない場合は、これを引くと良いでしょう。ただ採られている語彙にはやや偏りもあり、字体は旧漢字、字音や熟語の配列は歴史的仮名遣いです。別に、常用漢字・現代仮名遣いによる語彙(地名や人名などを除く)の索引である

東洋学術研究所編『大漢和辞典語彙索引』大修館、1990
 と、漢字や熟語を補った

鎌田正・米田寅太郎共編『大漢和辞典補巻』大修館、2000
 があります。

これとならぶのが、

*『漢語大詞典』全12巻附録索引1巻、漢語大詞典出版社、1986～1994

です。『大漢和辞典』と異なり、人名、字号・別称、地名、日本の語彙などは採っていない、純粹な漢語の辞典で、しかも『大漢和辞典』よりも語彙の収集が網羅的ですし、同じ漢字や熟語の解説にも違いがあります。これには別に、

*『多効能漢語大詞典索引』漢語大詞典出版社、1997

*『漢語大詞典首字序索引』世紀出版集団・漢語大詞典出版社、2003

*『漢語大詞典訂補』上海辞書出版社、2010

があり、『大漢和辞典』以上に様々な方向から漢語の熟語を調べることが出来ます。

特に現代口語に近い漢語については、

大東文化大学中国語大辞典編纂部編『中国語大辞典』上下、角川書店、1994

が有用です。ただ、これは本来は現代中国語の辞典なので、配列は現代中国語のローマ字表記(拼音)による配列です。

漢字一字の成り立ちや意味については、

白川静『新訂字統』平凡社、2004

がよいでしょう。この字典から、多くの普及版も作られています。

崩された漢字(草書)を読むとする際には、

児玉幸多『くずし字解説辞典』東京堂、1993 (初出は近藤出版社、1970)

圓道^{まろみち}祐之^{ゆきの}編『草書の字典』講談社学術文庫421、1979 (初出1935)

があります。ともに、草書を形から引けるように、独特の排列法を採っています。

中国の事件・人物・書籍などを調べる際には、

『アジア歴史事典』全10巻 平凡社、1959～1962

があります。内容は幅広く、文学・哲学・芸術などの問題にも十分対応できま

す。また、現代の問題やより一般の問題については、

『世界大百科事典』全35巻 平凡社、1988

などの百科事典も有用です。特に、日本と関係が深い問題については、

『国史大辞典』全15巻 吉川弘文館、1979～1997

も参考になるはずですが、いずれも五十音順の配列ですが、いわゆる「大項目」

での解説もあるので、索引から引くようにしてください。

文学・言語などについては、下記のものがあります。

近藤春雄『中国学芸大事典』大修館、1978

松浦友久編『漢詩の事典』・『唐詩解釈辞典』校注』正統 大修館書店、1999

1987～2001

袁珂^か（^か）鈴木博^か『中国神話・伝説大事典』大修館書店、1999

佐藤喜代治^か『漢学百科大事典』明治書院、1996

哲学・思想については、下記のものがあります。

日原利国^か『中国思想辞典』研文出版、1984

溝口雄二^か編『中国思想文化事典』東京大学出版会、2001

中村元^か『仏教辞典』岩波書店、1989

中村元^か『広説佛教学語大辞典』全4巻、東京書籍、2001

野口鐵郎^か『道教辞典』平河出版社、1994

絵画・書道については、下記のものがあります。

王伯敏^か（^か）徐^か藤^か光^か二^か『中国絵画史事典』雄山閣、1996

中西慶齋^か編『中国書道辞典』木耳社、1981（第1版、2005）

西林昭一『中国書道文化辞典』柳原出版、2009

(3) 地図・年表など

中国の歴史地図では、日本語で読めるものは、

松田寿男・森鹿三^か編『アジア歴史地図』（『アジア歴史事典』「別巻」2）

平凡社、1966

があります。より詳しいものは、中国から出された、

*譚其^か驥^か主^か編『中国歴史地図集』全8冊 繁体字版 三聯書店、1991～1992

（初出は地図出版社、1982～1987）

で、巻末に地名索引があります。調べる地名が用いられていた時代と中国全体

との位置関係を注意して使ってください。

年表には、日本で刊行されているものは世界史のもので、

日比野丈夫『世界史年表』河出書房新社、1973

『コンサイス世界年表』三省堂、1976

などがあります。

また、元号、干支、西暦などを対照させた暦表には、

藪内清・舟木勝^か『アジア紀年表』（『アジア歴史事典』第9巻付録、平

凡社、1962）

藤島達朗・野上俊^か『東方年表』平楽寺書店、1955

があり、後者は携帯に便利です。

(4) 漢文法の概説

漢文法の解説には、

加地伸行『漢文法基礎 本当によくわかる漢文入門』講談社学術文庫、2010

があります。もとは受験生向けに書かれたものですが、全体を見渡した解説も

わかりやすく、索引もあつて使いやすいです。さらに、

小川環^か樹^か・西田太^か一郎^か共^か編『漢文入門』岩波全書233、1957

には、単文による基礎的な解説の上に、漢文の文体^かごとの解説があります。ま

た、西田太^か一郎^か『漢文の語法』角川書店、1980

には、漢字や文法」ことの読み方が整理されています。

(5) 訳注など

5-1 訳注叢書

主な漢文に現代語訳や注釈をつけた叢書には次のようなものがあります。波

線は以下に用いるその略称です。

『中国古典選』全38巻(朝日文庫、1978～1979、初出1965～1969、一部は朝日叢書)。

『中国文明選』全15巻(朝日新聞社、1971～1976)。

『中国詩人選集』全16冊別巻1冊総索引1冊・『中国詩人選集』全15

冊(岩波書店、1957～1959・1962～1963。この中の、小川環樹『唐詩概説』、

吉川幸次郎『宋詩概説』『元明詩概説』は岩波文庫青版、2005、2006・2006)。

『全訳漢文大系』全33冊(集英社、1973～1980)。

『中国古典文学大系』全60冊(平凡社、1967～1975)。

『新訳漢文大系』全120巻別巻1巻(明治書院、1960～、既刊119冊)。

『中国の古典』既刊17冊(講談社、1986～1991)。

『東洋文庫』(平凡社、1963～、既刊882冊)。

『漢詩大系』全24冊(集英社、1964～1968)。

『中国詩文選』全24冊(筑摩書房、1973～)。

『中国の古典』全33冊(学習研究社、1981～1986)。

『中国古典文学入門叢書』(日中出版社、既刊15冊、1984～)

『鑑賞中国の古典』全24冊(角川書店、1987～1989)。

『新編漢文選』(思想・歴史シリーズ)全10冊(明治書院、1996～1991)。

『中国古典小説選』全12巻(明治書院、2005～2009)。

『中国古典新書』全100冊索引1冊・『中国古典新書総編』既刊29冊(明德出版社、1967～1984・1985～)。

『ビギナーズ・クラシックス 中国の古典』角川ソフィア文庫、既刊20冊、2004～

『新訳漢文大系 詩人編』全12巻、明治書院、2019～

などがあります。また戦前に刊行された、

『国訳漢文大成』経子史部20冊文学部20冊『続国訳漢文大成』経子史部24冊文学部24冊(国民文庫刊行会、1920～1924・1928～1931)。

『漢文大系』(増補版)全22冊別巻・総索引各1冊(富山房、1972。初出1909～1916)。

は、現代語訳はありませんが、今でも類書のない書き下し文などがあります。

5-2 訳を探す場合の注意

漢文の詩や文を集めた書籍には、一人の作者の詩文だけを集めた詩文集(別集)と複数の作者の詩文を集めた詩文集(総集)とがあります。例えば、唐の李白の「黄鹤楼送辛浩然之广陵のうらやまのぼくろくありて」という詩は、李白の「別集」である『李太白集』と、明の李攀龍のりはんろうが唐詩を集めた「総集」である『唐詩選』の両方に入っています。現代の訳注もこれと同じで、『中国詩人選集』のように作者ごとになっているものと、『中国古典選』で訳された『唐詩選』のように複数の作者の詩文集になっているものがあり、さらにその編集も、『唐詩選』のように過去に編集された詩文集をそのまま訳しているものと、現代の訳注者が新たに編集したものとがあります。ですから、実際に漢文を調べる場

合には、調べたい漢文の題が、畫籍自体の名前なのか、一篇の文章や詩で別の書名の詩文集に入っているのか、さらに別名の詩文集の場合には「別集」なのか「総集」なのか、などを知らなければなりません。

5-3 作品・作者ごとの訳注

以下は、中学校・高等学校に採られた漢文を中心に、主な訳注を整理したものです。時代を漢以前、魏晉南北朝、隋唐、宋元、明、清に分け、それぞれの時代の中で作品を五十音順にし、最後に複数の作者の作品を集めた「総集」、時代のまたがる歴史書、などをならべました。特に詩・文は、各時代の個人の著作と、各時代と末尾の総集の両方をあわせて見てください。『』で囲んだものは作品名、囲んでいないものは作者を示し、…のあとに訳注を挙げました。前述の訳注叢書の場合には略称と叢書内の巻数を書き、それ以外の場合は、書名と出版社名を書きました。また、作品名や作者名と訳書の書名とが異なる場合には、書名を記しました（そのうち同じ部分はⅡ）が、全く同じ場合は省略しました。総集の書名で太字にしてあるものは、すでに編纂されていたものの翻訳です。%印は部分訳、+印は書き下しまたは訓点のみを示しています。

a 漢以前

- 『晏氏春秋^{あしししゅう}』…谷中信一、新編9・10、2000～2001
『易』…本田濟、古典選1・2、1978
『淮南子^{えなんし}』…楠山春樹、新釈54・55・62、1979～1988。戸川芳郎ほか、古典大系6、1974。%池田知久、講談社学術文庫、2012。
『管子』…遠藤哲夫、新釈42・43・52、1989～92。

『韓非子^{かんひし}』…金谷治、岩波文庫4冊、1994。

『儀礼^{ぎれい}』…池田末利、5冊、東海大学出版会、1973～7。

『孝経』…栗原圭介、新釈35、1986。加地伸行、講談社学術文庫、2007。

『孔子家語』…宇野精一、新釈33、1996。

『国語』…大野峻、新釈66・67、1975・78

『呉子』…山井湧、全釈22『孫子』、1975。金谷治、『老子・荘子』…』古典大系4、1973。

『詩経』(毛詩)…白川静、『国風』／『雅頌』、東洋518／635・636、1990・1998。目加田誠(定本)Ⅱ訳注(『目加田誠著作集』2・3、龍溪書舎、1982・1983。%吉川幸次郎『国風』詩人選集1・2、1958。

『荀子^{じゆんし}』…金谷治ほか、全釈7・8、1973・1974。

『周礼^{しゅうれい}』…本田二郎『一通釈』上下、汲古書院、1977・79

『春秋左氏伝^{しゅうしゅうざいしでん}』…竹内昭夫、全釈4・6、1974～1975。小倉芳彦、岩波文庫、3冊、1988～1989。%安本博、ビギナーズ、2012。

『尚書』(書経)…池田末利、全釈11、1976。吉川幸次郎『正義』(『吉川幸次郎全集』8～10、筑摩書房、1970(初出)、岩波書店、1940～43)。

諸子百家^{しよしひやくか}…貝塚茂樹ほか、世界古典文学全集19、筑摩書房、1965。金谷治、世界の名著10、中央公論社、1966。

『新序』…広常人世^{ひろつねよせい}、新書、1973。

『説苑』…池田秀二、講談社古典、1991。%飯倉照平、『淮南子』Ⅱ古典大系6、1974。

『戦国策』…近藤光男、全釈23～25、1979。近藤光男、講談社古典、1987。堂石茂、古典大系7、1972。

『老子』…福永光司、古典選12、17、1978。赤塚忠^{きよ}、全釈16・17、1974。興膳宏^{ひろ}、『世界古典文学大系』17「老子」、筑摩書房、2004。% 興膳宏ほか、ちくま学芸文庫3冊、2011、2013。池田知久『全訳注』上下、講談社学術文庫2冊、2014

『楚辭』…青木正兒^{まき}『新釈』(『青木正兒全集』4)春秋社、1973。目加田誠^{まかた}『訳注』(『目加田誠著作集』3)龍溪書舎、1983。

『孫子』…山井湧^{ゆう}、全釈22、1975。浅野裕一、講談社学術文庫、1997。

金谷治『新訂』、岩波文庫、2000。%湯浅邦弘、ビギナーズ、2012。

『大学』『中庸』…島田虔次、古典選6・7、1978。金谷治、岩波文庫、1998。% 矢羽野隆男、ビギナーズ、2016

『墨子』…渡辺卓、全釈18・19、1974・1975。藪内清、東洋599、1996。

『孟子』…金谷治、古典選8・9、1978。宇野精一、全釈2、1973。佐野大介、ビギナーズ、2015。

『礼記』…市原亨吉、全釈12~14、1976~79。竹内照夫、新釈27~29、1971~79。

『呂氏春秋』…町田三郎、講談社古典、1987。楠山春樹ほか、新編1-3、1996。% 1998。

『列子』…福永光司、東洋533・534、1991。小林勝人、岩波文庫2冊、1987。

『列女伝』…山崎純一、新編4-6、1996、1997。中島みどり、東洋686・688、689、2001。

『老子』…福永光司、古典選10・11、1978。小川環樹、中公文庫、1973。蜂屋邦夫、岩波文庫、2008。

『論語』…吉川幸次郎、古典選3-5、1978。宮崎市定^{みやざき}『現代語訳』、岩

波現代文庫、2000。平岡武夫、全釈1、1980。加地伸行、講談社学術文庫(増補版)、2009。/吉田公平、タチバナ教養文庫、2000。土田健次郎『集注』4冊、東洋841・850・854・858、2013、2015。

b 魏晉南北朝

『異苑』…前野直彬^{のりひら}『六朝・唐・宋小説選』古典大系24、1968。佐野誠子

『搜神記』幽明録・『他』小説選2、2006

『西京雜記』…飯倉照平『記録文学集』古典大系56、1969。%竹田晃ほか『穆天子伝』漢武故事、神異録、山海経他』小説選1、2007

『世説新語』…目加田誠、新釈76、78、1975、1977。井波律子、東洋843・845・847・849・851、2013、2014。%竹田晃、小説選3、2006。

曹植^{せいち}…伊藤正文、詩人選集3、1968。

『搜神記』…竹田晃、東洋10、1964。%佐野誠子『幽明録・異苑他』小説選2、2006。

『搜神後記』…前野直彬『六朝・唐・宋小説選』古典大系24、1968。% 佐野誠子『搜神記』幽明録・異苑他』小説選2、2006。

『續名譜記』…佐野誠子『搜神記』幽明録・異苑他』小説選2、2006

陶淵明^{たうえん}『潜』…松枝茂夫ほか『全集』上下、岩波文庫、1990。斯波六郎『詩訳注』北九州中国書店、1981。%一海^{いっかい}知義、詩人選集4、1968。% 都留^{つるみ}春雄ほか、鑑賞13、1988。%釜谷武志、ビギナーズ、2014。

c 隋唐

王維^{わい}…%都留春雄、詩人選集6、1968。%小川環樹ほか『詩集』岩波文

庫、1972。入谷仙介『研究』創文社、1976。十積清潭『陶淵明集』・王右丞『集』統国訳文18、1929。

韓愈^{かんいん}…清水茂、詩人選集11、1958。%清水茂、世界古典文学全集30AB、筑摩書房、1986・87。十久保天随『韓退之詩集』統国訳文7・8、1928・29。

杜甫…黒川洋一、詩人選集9・10、1963。%黒川洋一、鑑賞17、1987。吉川幸次郎『詩注』岩波書店、2012。%下定雅弘ほか『全詩訳注』全4冊、講談社学術文庫、2016。

杜牧^{とく}…%荒井健、詩文選18、1974。松浦友久ほか『詩選』岩波文庫、2004。

白居易^{びやくし}（楽天）…岡村繁ほか『白氏文集』新釈97〜109、1988。%高木正一、詩人選集12・13、1958。%西村富美子『白楽天』鑑賞18、1988。%

武部利男『白楽天詩集』平凡社ライブラリー、1998。%川合康三『白楽天詩選』2冊、岩波文庫、2011。%下定雅弘『白楽天』ビギナーズ、2014。

『蒙求』…今鷹真、鑑賞15、1989。%今鷹真、ビギナーズ、2014。

李商隱^{しやういん}…%高橋和巳、詩人選集15、1958。%川合康三『詩選』岩波文庫、2008。

李白…武部利男、詩人選集7・8、1958。%青木正兒、漢詩8、1965。%寛久美子、鑑賞16、1988。松浦友久『詩選』岩波文庫、1997。十久保天随『李白詩集』統国訳文1-3、1928。

柳宗元^{りゅうげん}…%寛文生『韓愈・柳』詩文選16、1973。%下定雅弘『詩選』岩波文庫、2011。松本肇『研究』創文社、2000。

『歴代名画記』…岡村繁・谷口鉄雄『文学芸術論集』古典大系54、1973。長広敏雄、東洋305・311、1977。

d 宋元

王安石^{しやんしん}…清水茂、詩人集4、1962。

黃庭堅^{ていけん}…%荒井健、詩人集7、1963。%倉田淳之介、漢詩18、1967。

蘇軾^{そく}…%小川環樹、詩人集5・6、1962。小川環樹『蘇東坡詩集』全13冊、筑摩書房、1983。%十岩垂憲徳『蘇東坡詩集』6冊、統国訳文13〜17、1928

〜1931。%小川環樹『蘇東坡集』文明選2、1972。『東坡志林』、松枝茂夫『記録文学集』古典大系56、1969。『東坡居士文字雜説』、大木康『笑林・笑贊・笑府他』小説選12、2008。

陸游^{りく}…一海知義、詩人集8、1962。小川環樹、詩文選20、1974。%前野直彬、漢詩19、1964。%一海知義『詩選』岩波文庫、2007。岩城秀夫『入蜀記』東洋463、1987。%老学庵筆記、松枝茂夫『記録文学集』古典大系56、1969。

e 明

高啓…入谷仙介、詩人集10、1962。十久保天随『高青邱詩集』統国訳文19〜22、1930。

『五雜俎』…岩城秀夫、東洋605・610・617・623・629・633・640・646、1996〜98。

『西遊記』…中野美代子、10冊、岩波文庫、2005。太田辰夫ほか訳、古典大系31〜32、1971〜72。%入谷仙介、世界文学全集9、筑摩書房、1970。

『三國志演義』…井波律子、講談社学術文庫、4冊、2014。小川環樹ほか『完訳三國志』8冊、岩波文庫、1988。立間祥介、古典大系26〜27、1968。%小川環樹ほか『三國志』岩波少年文庫3冊、1980。

『水滸伝』：井波律子、講談社学術文庫5冊、2017。吉川幸次郎ほか
『完訳』10冊、岩波文庫、1968～99。駒田信一、古典大系28、30、
1967～68。%松枝茂夫、岩波少年文庫3冊、1975

f 漬

『閨微草堂筆記』：%前野直彬、古典大系42、1971。

袁枚：%「子不語」、前野直彬『閨微草堂筆記』古典大系42、1971。

手代木公助『子不語』東洋788・790・792・794・795、2009。黒田真美子

ほか『閨微草堂筆記』続子不語小説選11、2008。/「続子不語」黒

田真美子ほか『閨微草堂筆記』子不語小説選11、2008。/青木正児

『随園食單』岩波文庫、1980。

『紅樓夢』：井波陵一、7冊、岩波書店、2013～14。松枝茂夫、改訳版12

冊、岩波文庫、1972～85。伊藤漱平、古典大系44、46、1969～70。

愈穢：「春在堂隨筆」、%岩城秀夫『近世隨筆集』古典大系55、1971

『聊齋志異』：増田涉ほか、古典大系40・41、1970・71。立間祥介、岩

波文庫2冊、1997。黒田真美子、小説選9・10、2009。

長巻集

「詩文」

小尾郊一ほか『文選』全釈26、32、1974～76。

%興膳宏ほか『文選』鑑賞12、1988。

入矢義高ほか『増補 明代詩文』東洋764、2007。

「詩（時代別・主題別）」

入谷仙介『古詩選』古典選23・24、1978

伊藤正文ほか『漢・魏・六朝詩集』古典大系16、1972

内田泉之助ほか『古詩源』漢詩4・5、1964

十岡田正之ほか『古詩賞析』増補版、漢文大系18、1976

石川忠久『玉台新詠』学研古典25、1966

長谷川滋成『東晉詩訳注』汲古書院、1994

高木正一『唐詩選』古典選25、28、1978

村上哲見『三体詩』古典選29、32、1978

目加田誠『唐詩三百首』東洋239・265・267、1973～75

深沢一幸『唐詩三百首』鑑賞19、1989

深澤一幸『唐詩選』ビギナーズ、2014

前野直彬『唐代詩集』古典大系17・18、1969・70

松浦友久『中国詩選(Ⅲ)―唐詩』現代教養文庫、社会思想社、1972

小川環樹ほか『唐宋詩集』世界文学大系8、筑摩書房、1975

小川環樹『宋詩選』筑摩叢書、1967

入谷仙介『宋詩選』古典選33、34、1979

山本義和ほか『宋代詩詞』鑑賞22、1988

宋代詩文研究会『宋詩選注』4冊、東洋722・727・733・737、2004

前野直彬『宋・元・明・清詩集』古典大系19、1973

近藤光男『清詩選』漢詩22、1967

入谷仙介ほか『近世詩集』文明選9、1971

松枝茂夫『中国名詩選』3冊、岩波文庫、1983～86

川合康三『新編中国名詩選』3冊、岩波文庫、2015

入矢義高『中国文人詩選』中公文庫、1992

青木正児『中華飲酒詩選』筑摩叢書、1964

竹内実『中国喫茶詩話』(茶道文化叢書)、淡交社、1982

鈴木虎雄『中国戦乱詩』筑摩叢書、1968

「楽府」

小尾郊一ほか『古楽府』東海大学古典叢書、東海大学出版会、1980
 田中謙二『楽府散曲』詩文選22、1983

「散文」

吉川幸次郎ほか『中国散文選』世界文学大系72、筑摩書房、1965
 吉川幸次郎ほか『中国の散文』詩文選1、1984
 伊藤正文ほか『漢・魏・六朝・唐・宋散文選』古典大系23、1970
 清水茂『唐宋八家文』古典選35、38、1978～79
 寛文生『唐宋八家文』鑑賞20、1989
 本田清ほか『近世散文集』文明選10、1971
 本田清『近世散文選』鑑賞24、1988
 前野直彬『文章規範』新釈17・18、1961
 猪口篤志『続文章規範』新釈56・57、1977
 佐藤保ほか『古文真宝』学研古典26、1984
 星川清孝『古文真宝前集』『古文真宝後集』新釈9／10・16、1967／1963
 吉川忠夫『魏晉清談集』講談社古典、1986
 合山究『明代清言集』講談社古典、1986
 合山究『清代清言集』講談社古典、1987
 入矢義高『近世隨筆集』古典大系55、1971
 松枝茂夫『記録文学集』古典大系56、1969
 松枝茂夫『歴代笑話集』古典大系59、1970
 駒田信二『中国笑話集』ちくま文庫、1972
 松枝茂夫『中国笑話選』東洋24、1964
 松枝茂夫『笑府』岩波文庫2冊、1983。
 後藤基巳『中国古代寓話集』東洋109、1968

h 小説

前野直彬ほか『幽名録・遊仙窟ほか』東洋43、1963
 %佐野誠子『搜神記・幽明録・異苑他』小説選2、2006
 今村与志雄『唐宋伝奇集』2冊、岩波文庫、1988
 前野直彬『唐宋伝奇集』東洋2・16、1963・64
 前野直彬『六朝・唐・宋小説選』古典大系24、1968
 金文京『中国小説選』鑑賞23、1989
 吉川幸次郎ほか『中国古小説集』世界文学大系71、筑摩書房、1964
 松枝茂夫ほか『宋・元・明通俗小説選』古典大系25、1970

i 民話

村松一弥『中国の民話』2冊、毎日新聞社、1972
 沢田瑞穂『中国の昔話』三弥井書店、1975
 飯倉照平『中国民話集』岩波文庫、1983
 馬場英子ほか『中国昔話集』東洋761・762、2007
 牧田英一ほか『義和団民話集』東洋244、1973
 立間祥介『中国講談選』東洋139、1969

i 理論・評論

荒井健ほか『文学論集』文明選13、1972
 目加田誠『文学芸術論集』古典大系54、1973
 福永光司『芸術論集』文明選14、1971
 宮崎市定『政治論集』文明選11、1971（『宮崎市定全集』別巻、岩波書店、1983、に再録）
 川勝義雄『史学論集』文明選12、1973

後藤基巳ほか『明末清初政治評論集』 古典大系 57、1971
西順蔵ほか『清末民国初政治評論集』 古典大系 58、1971
小野信爾ほか『革命論集』 文明選 15、1972

本歴史書

『史記』：野口定男ほか、古典大系 10、12、1968～71。小川環樹ほか『列伝』 5冊・『世家』 3冊、岩波文庫、1975・1980～91。%田中謙一ほか、古典選 18、22、1978。
『漢書』：小竹武夫、ちくま学芸文庫 8冊、1997～98（初出は、筑摩書房 3冊、1977～79）。%寛谷至ほか『五行志』・狩野直禎ほか『郊祀志』・永田英正ほか『食貨志』・地理・溝洫志』・東洋 460・474・488、1986・87・88。%鈴木由次郎『芸文志』新書、1968。%高木友之助・片山兵衛『列伝』新書統編 15、1991
『後漢書』：十吉川忠夫、岩波書店、10冊別冊「人名索引・地名索引」、2001～2007。渡辺義浩『全訳』 18冊別巻 1冊、汲古書院、2001～2016。%本田濟『漢書』・『三國志列伝選』 古典大系 13、1968
『三國志』：今鷹真ほか、ちくま学芸文庫 8冊、1992～93（初出は、世界古典文学全集 24-ABC、筑摩書房、1977～80）
『資治通鑑』：%田中謙一、文明選 1、1974、%新田大作ほか、『選』 古典大系 14、1970、%竹内照夫、新書、1971、+加藤繁ほか、『目録』 統国歌経 1-18、1928～30
『十八史略』：今西凱夫、学研古典 15・16、1983・85。%竹内弘行、講談社学術文庫、2008。

1 仏書

入矢義高『仏教文学集』 古典大系 60、1975
金岡照光『漢訳仏典』 学研古典 10、1983
長尾雅人ほか監修『大乘仏典』 15巻、中公文庫、2001～2005。
長尾雅人ほか監修『大乘仏典』 「中国・日本篇」 30巻、中央公論社、1987～1996
中村元『現代語訳大乘仏典』 7冊、東京書籍、2003～2004。
西谷啓治ほか『禪家語録』 世界文学全集 36-1 AB、筑摩書房、1972・1974。
足立大進編『禪林句集』 岩波文庫、2009

その他の

藪内清ほか『中国天文学・数学集』 科学の名著 2、朝日出版社、1980
佐藤武敏『中国の花譜』 東洋 622、1997
中村喬『中国の食譜』 東洋 594、1995
布目潮風『中国の茶書』 東洋 289、1976

(6) 漢字の検索について

前述のような、様々な辞典や索引を検索する際には、どうしても漢字が避けられません。ここでは、漢字自体を調べたり、または漢字を用いて検索したりする際の方法や注意について説明します。

6-1 読み方による検索

a 日本語よみ

日本語の読み方のわかっている漢字や熟語を検索する場合には、「直読み」

と「訓読み」のいずれかで検索します。一般に漢字字書では「真読み」をカタカナで、「訓読み」をひらがなで表記して五十音順に配列してありますが、字書によって、「音読み」「訓読み」を混ぜて列べてある字書と、別々にしてある字書とがあります。

「音読み」

むかし中国から日本に漢字が入ってきた時に、中国人の漢字の読み方を聞いて日本人がまねた発音で、もとの中国語の系統によって、漢音・唐音・呉音などの区別があり、さらに日本での習慣で定着した慣用音もあります。

「訓読み」

中国から入ってきた漢字に対して、日本の意味を当てた読み方です。ただ、「菊」や「馬」のように音がほぼそのまま訓になっているものもあります。

b 中国語よみ

一言で中国語といっても、実際には様々な方言がありますが、方言を調べる辞書でない限り、一般に使われているのは、北京語を基礎とした「普通話」（標準語）です。ただし、同じ「普通話」でも表記の仕方は様々で、ローマ字による「拼音字母（ピンイン）」と「ウェード式」、さらにローマ字とは全く異なる「注音字母」があります。

「拼音字母（ピンイン）」

現在、中国大陸で用いられているローマ字による表記法で、ローマ字の上、同じ音の中での上がり下がりの調子を示す「声調符号」がつかえます。現在、日本で主に用いられている表記法もこれです。

「ウェード式」

主に欧米で用いられている表記法で、「l」「u」「ü」などの符号があり、欧米の文献や論文での中国語表記に用いられています。最近では「拼音字母」に変わってきています。中国語の辞書などには「拼音字母」との対照表がついています。

「注音字母」

主に台湾で用いられている、カタカナのような符号です。イ(ch)、尤(ang)、又(ou)などのように、ローマ字表記との対応関係がありますが、配列は独特で「拼音字母（ピンイン）」「ウェード式」のローマ字表記のABC順とは対応しません。

6-2 形からの検索

漢字を調べようとして困るのは、むしろ、読み方がわからない場合です。日本語の読み方がわかっている場合、中国で出版された書籍の場合には全く役に立ちませんので、形からの検索方法はどうしても必要です。大きく分けると、書き順や画数がわかることを前提として検索する方法と、書き順や画数を考えずに漢字の部分の形から検索する方法とがあります。

a 書き順や画数がわかることを前提とする検索

「総画数」

漢字の中で一筆で書ける部分を1画として、全体または各部分を数えた数を「画数」といいますが、一つの漢字全体の画数（総画数）を数え、総画数の少ない順に列べられている索引を用いて検索する方法です。単純であるかわりに、同じ画数の中に多くの漢字が入ってしまうので、目的の漢字を見つけるのに苦労することもしばしばです。同じ画数の中の配列は、日本の漢字字書のように部首の順番によっているものと、中国の字書のように1筆の形を「一、丨、ノ、丶、丨」にわけて書き順に従ってこの形の順になべているものがあります。

「部首十旁の画数」

漢字字書を検索する際の最も基本的な方法です。漢字字書が用いる漢字の配列体系は、全ての漢字を、画数順に列べられた214種の「部首」に分類し、さらに同じ「部首」に分類された漢字を「旁（部首を除いた部分）」の画数順に列べる、というものです。分類が「部首」と「旁の画数」の2段階になっています。

から、部首の分類を間違わなければ、前述の「総画数」による検索よりも検索しやすいはずだ。

b 部分の形からの検索

「四角号碼」

漢字の「四角(四隅)」を10種の形(一、丨、丿、丶、十、丰、口、冂、八、小)に分類して0〜9までの「号碼(番号)」を与え、左上・右上・左下・右下の順にすべて4桁の数字で表し、この数字の順にならんだ漢字を検索する方法です。読み・画数・部首が一切わからなくても検索できる点で便利な方法なのですが、例外も随分ありますので、使いこなすには慣れが必要です。

6-3 注意

漢字の読みがわからず、また前述の6-2 b「部分の形からの検索」に習熟していない場合には、漢字は部首と画数によって検索するしかありませんが、その際には、漢字の形・部首・画数を正確に理解してはなりません。ここでは、その注意点について説明します。

a 漢字の形

現在、全世界で用いられている漢字は、同じ漢字でも微妙な差異があるものがあります。

「旧漢字」

17世紀の後半に、清の康熙帝の命によって作られた『康熙字典』を基準とする形で、「+」は4画、「丨」の点は2つ、部首総数214…など、最も煩瑣な形です。主に、台湾、香港、韓国、欧米で用いられており、日本でも、最大の漢字辞書である『大漢和辞典』が用いているように、特に古典に関わる分野では用いられています。

「繁体字」

中華人民共和国において、上記「旧漢字」の形を少しだけ省略したもので、「+」は3画、「丨」の点は1つ、部首総数200…などの変更点があります。中華人民共和国には、別に下記の「簡体字」がありますので、この形が用いられるのは古典に関わる分野のみです。その詳細については『漢語大詞典』第1巻の「部首排檢法說明」および「新旧字形对照筆例」に詳しいです。

「簡体字」

1964年に中華人民共和国が定めた、漢字の省略形で、全ての漢字に対して必要な場合には省略を施しています。このため画数と部首の体系が、「旧漢字」や「繁体字」と大きく異なっています。『新字源』の付録に「中国簡体字表」があり、その概要を知ることが出来ます。

「常用漢字」

日本において、漢字全体の中からよく使う漢字を選んだもので、その中で形が複雑な一部の漢字に対して省略を施してあります。このために、同じ部首や旁でありながら、「常用漢字」に入っていないかどうかで、形が異なるものがあります。例えば、「旧漢字」では旁を「龍」で統一してあった「灑」「襲」「籠」などの中で、「灑」のみを「灑」とし、また「麥」を「麦」と省略しながら、「麥」を部首とする漢字は「麴」「麩」「麩」「麩」のままとしています。また、最近の改訂の結果、「常用漢字」の中でも、「錢」と「箋」、「輸」と「諭」などのように、形に不統一があります。

b 部首と旁

部首は、漢字の意味の分類体系で、例えば、水に関係するものが「氵」、木に関係するものが「木」、に分類されます。しかし、部首の総数は214もある上に抽象的なものもあり、さらに全てが同じ形で統一されているわけではありません。例えば、「丨」には「怖・感・恭」、「衣」には「裏・裕・袋」のような形のヴァリエーションがあり、さらに、「峰・峯」「島・嶋」のように、同じ字でありながら位置関係のヴァリエーションがあるものもあります。

これに対して、大多数の場合、旁は音の分類体系です。ですから、大多数の漢字は意味を表すだけでなく、音も表している「表音表意文字」であり、また旁には傍の体系があつて、同じ傍の漢字は非常に似た音読みです。例えば「冷」「鈴」「齡」「苓」「零」「領」のようにです。そして、このことを逆に利用すれば、部首を捜すだけでなく、傍の部分を捜して残りを部首にする、という部首の探し方が出来るはずです。先の例で言えば、それぞれ「ㄩ」「金」「齒」「艸(クサカンムリ)」「雨」「頁」が部首になります。

ただし、部首と傍の分類は、小中学校で習う漢字以外は、絶対的な決まりはないので、現在では、字書ごとに分類が異なります。その字書の中では整合性がとられていて、検索しやすくなっていることも多いのですが、大きな字書になればなるほど、部首を変更しなければならぬ漢字が増えるために、おおもとの『康熙字典』の部首分類にあわせざるを得なくなります。最初は使いにくくても、おおもとの部首分類に近い字書を使われる方がいいと思います。

c.画数

部首自体の排列も、同じ部首の中に分類された漢字の排列も、いずれも画数の少ない方から多い方へ排列されています。ですから、画数が正確に数えられなくてはなりません。そのためには、まず、別の人が字を書いているところをよく見て、書き順をしっかりと身につけることが重要です。ただし、小中学校で習う漢字以外は、画数や書き順にも絶対的な決まりはないので、日本と中国、現代と古代で異なっているものがたくさんあります。

画数の数え方で注意しないといけないことは、左下に「乚」のような鍵形を持つている部分です。この部分は、旧漢字では1画に数えますが、常用漢字では2画に数えることがあります。例えば、「偉」の総画数は旧漢字は11画ですが常用漢字は12画、しかし、「囿」の旧漢字「囿」は旧漢字しかないので、総画数は12画しかありません。また部首の「厶」は旧漢字しかなくて4画です

ので、「既」の旧漢字「既」の総画数は、旁(左の部)の7画とあわせて11画になりますが、常用漢字の「既」では部首「厶」を5画に数え、旁の5画とあわせて総画数は10画になります。「蠶」が24画であるように、この部分が2つ以上出てくる漢字の場合には特に注意してください。これに中国の「繁体字」「簡体字」が入ってくると、問題はさらに複雑になります。

漢文学 教材と資料

二〇一七年十二月一日 初版発行

著者 豊後 宏記

宮崎 洋一

発行所 広島文教女子大学

〒七三三-10295

広島県広島市安佐北区可部東1-2-1

TEL 082-1814-3291